

---

# メビウス～夢の国のコナン～

なんじ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メビウス〜夢の国のコナン〜

### 【Nコード】

N3009A

### 【作者名】

なんじ

### 【あらすじ】

ある日、コナンは教室で倒れ意識が戻らなくなる。なすすべもなく、苦悩する哀。その頃、コナンは夢の中で、キッドから、勝負を持ちかけられていた。その勝負に勝たなければ、夢に閉じ込められると聞き、コナンは、キッドに挑む。〜「不思議の国のアリス」を下敷きにした、ファンタジーです。

## 現実（うつしよ）の章 0・序章

チャイムの音に、哀は読みかけの本を閉じた。  
教室の中にクラスメイト達が戻ってくる。

午後の授業の始まりだ。

「どうしたんですか、コナン君。」

後半のプレーいつもの切れがありませんでしたよ。」

「そうだよ、パスもってかれちまってよ。」

俺が止めてなきゃA組の奴らに負けちまってたぞ！」

「ああ。すまん、光彦、元太」

歩美が遅れて入って来て、コナンに駆け寄った。

「コナン君、コナン君、大丈夫？」

「歩美ちゃん、大丈夫だよ」

軽くコナンは答えると、哀の隣の席に座った。

「お疲れのようね、探偵さん」

「少しな。事件続きたし・・・」

妙に素直な返事に哀は戸惑いを覚えた。

「あら、そんな事でいざとなったら私、あなたに守ってもらえるのかしら」

わざと嫌味を込めている哀を、コナンは不思議な物でも見るように見つめた。

そして眼鏡を外すと目をこすった。

「どうしたの、工藤君」

小林先生が教室に入ってきたので、哀は小声で話す。

「いや、一瞬お前の顔がよく見えなかったんだ」

「あら、もう老眼？」

「ぬかせ。昨日ちよっと遅くまで本を読んでいたしな。  
今日は早く寝た方が良さそうだ。」

小林先生は教壇の前に椅子を出して座った。

手には一冊の本を持っている。

「今日の、国語の時間は先生が本を読みます。

題名は『不思議の国のアリス』。

皆さん、知っていますか？」

「知ってる！デイズニerlandにいるよ！」

「アニメなんだよね！」

皆が口々に言う。小林先生は少し苦笑しながら

最初にルイス・キャロルの説明をして朗読を始めた。

哀は、姉の明美のことを思い出した。

姉が読んでくれた『不思議の国のアリス』。

頼んで膝枕で、読んでもらった。

そうすると自分がアリスになれるような気がした。

その頃は姉に、二度と会えない日々が来る事など、考えつきもしなかった。

優しい声の小林先生の朗読に、哀は物語の中に引き込まれていくような気がした。

しかしその気分を、台無しにする音が、隣の席から聞こえてきた。

コナンの寝息だった。

頬杖をついたまま眠っている。

哀は苦笑した。

” 工藤君には『赤毛同盟』とかの方が良かったのかしら ”

そつと、体を実付けてみる。

しかし、コナンは眠ったままである。

” 幸せそうな寝顔なこと ”

先生には、気付かれそうも無いから、

このまま、寝かしといて、あげましようか ”

哀は微笑んだ。

## 夢の章 1・夢の始まり

「もう、コナン君ったら」

歩美の声にコナンは我に返った。

「もう一度言いますよ。」

3時に、阿笠博士のうちに集合。

遅れないで下さいね」

光彦が、腰に手を当てて言う。

元太が、腕組みをして、

哀が醒めた笑みでこちらを見つめている。

「ああ、判ったよ、3時な」

ついさっきまで、教室にいたような気がしたんだが、

それは夢だったのだろうか。

いつもどおりの帰り道。

コナンは、頭を軽くふって、

歩美達と別れて、街角を曲がった。

見飽きるほど見なれた風景がそこに在った。

しかしどこにも人がいない。

道路にはバスも車もある。

しかしそれは動いていない。

中は空っぽである。

物音一つしない沈黙の世界だった。

コナンはしばし呆然と立ちすくんだ。

足元に濃い霧が満ち潮のように寄せてくる。

霧は、たちまちの内にコナンの視界を遮った。

町の輪郭が幻のようにぼんやりした物に変わっていく。

ゆっくりとした足音が、前方から聞こえてくる。

コナンは目を凝らして人影が誰なのか見定めようとした。

霧の中から姿を現したのは、忘れようの無い人物だった。

白いシルクハットとマントをまとった男は、

悠然とした足取りでコナンの方にやって来る。

コナンはその名を叫ぼうとして、

自分が金縛りにあった様に動けなくなっているのに気づいた。

男はコナンの目の前に立つと、

満足げな笑みを浮かべてその顔を覗き込んだ。

コナンは自分の本能在、最大級の警報を発しているのを聞いた。

”こいつの目を見てはいけない！”

しかし、コナンは男の瞳に吸い寄せられるように覗き込んだ。

男の左眼は漆黒の闇の色、

そしてモノクロ越しに見えるもう片方の瞳は、

けぶる様な輝きを帯びた黄金色だった。

コナンの視界を男の白い手袋が遮った。

男の手のひらに乗っているのは金無垢の懐中時計である。

蓋が、突然開いた。

奇妙な時計だった。

文字盤はある。

しかし時計の針が無かった。

「さあ、夢の時間の始まりだ」

男は静かにコナンに告げた。

針の無い時計から刻を刻む音が聞こえてきた。

男が高らかに笑った。

コナンは一瞬自分の周りの景色がぐるりと反転してしまうような感覚に襲われ、

思わず目を閉じた。

目を開けると男の姿は目の前から消えている。

コナンは自分の体が動くようになっていている事に気が付いた。  
振り返るとあの男が霧の中に姿を消していくのが見えた。

コナンは走り出した。

「待て！キッド！」

キッドは、コナンの追跡に気づかぬかのように、見返りもせず歩き続けた。

コナンは必死に走ってキッドの後を追った。

しかし、ゆっくり歩いているようにしか見えないキッドになぜか追いつく事ができない。

やがてキッドとはある建物の正面入り口に堂々と入っていた。

「M a g i c   s h o p   ”   R a b b i t   H o l e   ” ？」

いぶかしい気持ちで、コナンは店名を読んだ。

扉をゆつくりと押す。鍵はかかっている。

かすかな音を立てて、大きな木の扉は開いた。

隙間から中を覗く。

キッドはおるか、人の気配がまるで無い。

薄暗い店内の中にぼんやりとショーケースらしき物が並んでいる。

コナンは用心しながら扉を開け、店の中に足を踏み入れた。

店の床は確かにあった。

しかしその床はコナンの体を支えなかった。

コナンは自分の叫び声が響き渡るのを聞きながら奈落の底へ落ちていった。

## 現実（うつしよ）の章 1・教室

眠っていたコナンの頭がぐらりと揺れ、哀が支える間も無く机にぶつかった。

その音は教室中に響き渡った。

小林先生とクラス全員の視線がコナンに集まる。

コナンは机に突っ伏したまま眠っている。

教室中が笑いに包まれた。

小林先生も笑いを抑えるように口元に手を当てて、

コナンのところにやって来た。

「江戸川君、起きなさい」

肩に手をあて、軽くコナンの体を揺さぶった。

その拍子にコナンの片肘が、机からずり落ちた。

そして、そのまま体も椅子から床の上に落ちていった。

体が、床にあたる鈍い音。

それでも、コナンは目を閉じたままだった。

教室の空気が凍りついた。

「お、おい。コナン、いくらなんでも爆睡しすぎだぞ」

元太が、何とか目の前の出来事を

冗談にしようとするかのように言った。

その声に哀は正氣づいた。

コナンの横に屈み込み大声で名前を呼んだ。

わずかに、コナンは体を動かした。しかし目覚めない。

呼吸の様子、脈を見て、用心深く頭を探る。

小林先生がコナンを抱き上げようとした。

「先生だめよ、動かさない方がいいわ。」

哀が制止した。

「救急車を呼んできます。皆さん静かに」

そう言う小林先生は教室から走り出て行った。

「円谷君。江戸川君、サッカーの時に後頭部ぶつけなかった？コブが有るわ。」

そういいながら哀はコナンのまぶたをこじ開けて瞳孔を見る。とりあえず異常はないようだ。

「別に、どこも・・・」

光彦の言葉の終りを待たず震える声で歩美が口をはさんだ。

「コナン君、死んじゃうの？」

涙を浮かべている。

「大丈夫よ、脈はしっかりしているし・・・」

「でも、コナン君、頭をひどくぶつけたの」

「どこで！どうして！」

「私、ウサギの飼育当番で世話してたら、シロちゃんが逃げちゃった。

コナン君が捕まえてくれたんだけど、落ちてるスーパーボールに気づかなくて、踏んづけて転んじやったの。

それで、シロちゃん抱っこしてたから、後ろ頭、思いっきりぶつけちゃって」

「何ですぐ保健室へ連れて行かなかったの！」

歩美の顔は哀の剣幕に蒼ざめた。

「だってコナン君、平気だって。」

保健室行こうっていても、これからサッカーの試合あるからって・・・」

後は、言葉にならず歩美は泣き出した。

哀は静かにコナンを床に横たえた。

そして、歩美の肩を抱いて言った。

「ごめんなさい、あなたのせいじゃないわ。

頭を強打した後は安静にしとかなきゃいけないことくらい当然知ってるはずの江戸川君の自業自得よ」

遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。

コナンはただ静かに眠りつつづけていた。

## 夢の章 2・穴の途中

どのくらい落ちたのか？

コナンは妙な事に気がついた。

最初と比べ落ちていく速度が遅くなっている。

今は周りを見渡す余裕があるほどになっていた。

奇妙だった。

床の下に落ちたはずなのに周りには壁が無い。

その上、遠くには星の瞬きとしか思えぬものが輝いている。

「どうなってるんだ、これは？」

独り言のつもりの自分の言葉に返事があった。

「ここは夢の国の入り口」

目の前にキッドがいた。

「キッド！これはお前のマジックか！」

キッドは薄く微笑を浮かべたまま言った。

「私は君から”想い”を頂いたからね。

君は現実<sup>うつしよ</sup>にいられなくなった。

ただそれだけの事だよ。」

「どういうことだ！キッド！」

キッドは肩をすくめて言った。

「本当に、単純な事さ。それと私の名前は白ウサギ」

「ふざけるなよ。キッド」

キッドは、コナンをからかうような笑顔で言った。

「ほら、これが証拠」

キッドは自分の左肩をぼんと叩いた。

するとそこには白い毛皮、赤い目の仔ウサギがちょこんと現われた。

「そのどこが証拠だよ！」

コナンの言葉を、キッドは聞かなかったかのように、話した。

「そうそう、君にプレゼントだ」

キッドは、何も持っていない手を、さつとコナンの前で動かした。  
白い小さな花がコナンの目の前に現われた。

コナンは思わずその花を手にとり、しげしげと眺めた。

「エーデルワイス？」

「夢の国での新しい君の名前だ」

「どういう意味だ」

キッドは、謎めいた微笑を浮かべた。

「もし君が”想い”を取り戻したければ、私を追っておいで。

私は『火と水、風と土の集う場所』で君を待つ。」

そう言くとキッドは笑い声を上げた。

その声と、コナンを残しキッドは下へと落ちて行った。

コナンはキッドを追うため自分も速く落ちようと、体を色々動かした。

しかし、どうあがこうと、落ちる速度は変わらない。

疲れきって、諦めかけた時、急に落下速度が速まり

コナンは、穴の底にしたたかに尻もちをついた。

コナンは腰をさすりながらあたりを見回した。

自分が座り込んでいる所は、磨き抜かれた床の上。

見上げれば傷一つ無い天井があるばかり。

自分が落ちてきたはずの穴など、どこにも無かった。

綺麗に飾りつけられた見覚えの無い部屋を見渡すと、。

そこに、あまりにも、見知った顔が、あった。

「灰原！」

コナンは思わず叫んでいた。

「お前こんな所で一体何してるんだ！」

### 夢の章 3・チエシヤ猫

灰原哀は、テーブルの上に腰掛け、

ココアを飲みながら、ブリオッシュを食べていた。

頭には赤みがかかった茶色の猫の耳が一對ついている。

そして背中の方からは茶色地に焦げ茶縞模様の尻尾が覗いていて、生き物のように動いている。

”阿笠博士の奴、また妙チキリンなおもちやを作ったな”

コナンはそう思った。

哀は、コナンがいることにまるで気づかない様子で指を一本一本舐めている。

その動作は猫そのものだ。

コナンは哀の側によると、思わず椅子に乗って、

猫耳の手触りを両手で確かめてみた。

暖かく柔らかな触り心地は、本物としか思えない。

”なんか、犬夜叉の耳を触った、かごめの気持ち、分かるよな”

コナンは猫耳の手触りを、楽しみながらそう思った。

耳がピクリと動き尻尾がコナンをぴしゃりと叩いた。

「何をするの！せつかくの毛並みが台無しじゃない！」

「あ・・・、済まない。」

コナンは哀から離れた。

哀はコナンなど眼中に無い様子で、耳の毛並みを整えている。

”猫耳なんて、乱れるほどの毛なんかないのに、女って・・・”

そう思いながら、コナンは哀を見つめた。

哀は満足したのか手を下ろしコナンを正面から見つめた。

その時初めてコナンは哀の瞳の色がいつもと違う事に気づいた。

左眼だけが黄<sup>きん</sup>金色。

キッドの右目と同じ色だ。

「おい、灰原。お前、その目どうしたんだ」

哀は、無表情に答えた。

「私達の、片方の瞳は、現実<sup>うつしよ</sup>を映し、片方の瞳は、夢を映す。そう、私は、あなたの知ってる灰原<sup>うしろ</sup>って子じゃないわ。」

哀の顔に、笑みが浮かんだ。

その微笑みは、なぜか、コナンの背筋を凍らせた。

「ようこそ、アリス。私達の夢の国へ。」

私はチェシャ猫。夢の国の管理人の一人よ。」

この瞳の色は、その証。」

コナンは一瞬言葉を失った。

「チェシャ猫？夢の国？一体なんなんだ？」

それに俺はアリスなんて名じゃねえ。

俺の名は工藤新一だ！」

気を取り直して叫ぶコナンに、哀は皮肉めいた微笑を向け首を横に振った。

「いいえ、あなたの名前はアリスよ。」

もう一人の管理人である白ウサギがそう決めたのだから」

「白ウサギ！キッドの事か！」

管理人？お前、キッドと何の関係があるんだ？」

「私は白ウサギと同じ”物”よ。」

ティードルダムとティードルディーのようにね」

「双子ってことか、そんなバカな・・・」

哀の、猫がネズミを見るような視線にコナンは沈黙した。

「そんな事より、あなた、これからどうするつもり？」

哀に聞かれてコナンは答える事の出来ない自分に気づいた。

自分はキッドを追ってここに来た。

しかし、キッドはいなくなり、自分が一体どこにいるのか見当もつかない。

考えこんだコナンに哀は言った。

「あなたの選択肢は二つある。」

一つはこのまま夢の国に留まる事。

もう一つは白ウサギを見つけ出し”想い”を返してもらって、現実うつしよに戻る事」

「夢の国って、一体なんなんだ。

それに”想い”を返してもらう、ってどういうことなんだ」

哀はまつげを伏せていった。

「ここは、夢の国。現実うつしよから皆が訪れ、去っていくところ。

でも、現実うつしよから逃れたい人達もいてね、

そういう人達は、私達に自分自身の大切にする”想い”を差し出すの。

私達はその代わりに人をここの住人にしてあげるのよ。

その人の体が現実うつしよで生きている限りね。

でも、時々白ウサギがどうしても欲しい”想い”を持っている旅人があるの」

「”旅人”ってなんだ？」

「夢を見て再び現実うつしよに戻っていく人よ。

たいていの人はそうだわ。

差し出された”想い”以外本当は、私達は受け取る事は出来ないの  
だけど、

白ウサギは我慢できなくなるの。

だから、自分の欲しい”想い”を持った”旅人”からスキを見つけて  
それを奪ってしまうのよ」

「それじゃ、管理人じゃなくて、泥棒じゃねえか」

「いくら白ウサギと言えどもまるつきりここの住人になる気の無い  
人から

”想い”を盗む事は出来ないわ。

盗まれた人の心のどこかに、現実うつしよから逃げ出したい  
と言う気持ちがあるからこそ、白ウサギは”想い”を盗む事ができ  
るの。

だから、”想い”を盗られた人は自分自身が

どれだけ本当に現実うつしよへ戻りたいかを試されることになるのよ」

「俺は現実から逃げ出したいと思った事は無いぞ！」

コナンの言葉に、哀は心の奥底まで見通すかのような視線を向けた。  
左の黄金色の目が妖しく光ったような気がした。

「あなたは、本当にそういいきれなの」

コナンは思った。

” 今だ実態のつかめない黒の組織。

その探索の果ては「死」なのかもしれない。

それを、恐れる気持ちは無かった。

しかし、自分はそのため、何かを失う事を恐れていた。 なんだったのだろうか？ ”

コナンはしばらく黙り込んだ。

どうしても思い出すことが出来ない。

考え込むうちに、そもそも、そんな物は無かったような気がしてきたコナンは言った。

「言い切れはしない。

だが、俺は逃げたくない。

そう思ってることは言い切れるぞ！」

哀は小さくため息をついた。

「そう・・・、ならばお聞きなさい。

あなたが、この国から出たいのなら白ウサギを探しなさい。

ルールで彼は自分の居場所のヒントをあなたに与えているはず」

「『火と水、風と土の集う場所』か」

「そう。そこへ行けば” 想い ” は取り戻せて、現実うつしよに帰れるわ。

でもよくお聞きなさい、アリス。

この国に長く留まれば留まるほど、夢はあなたの現実を浸食していくわ」

「一体どういう意味だ」

哀は肩をすくめた。

「だんだん現実うつしよのことを忘れていくのよ。

白ウサギのことを見つけられずに、現実うつしよのことをすべて忘れてしま

えば、

あなたは、晴れてここの住人よ。」

コナンは息をのんだ。

「悪くは無いわよ。」

ここの住人になるのは。

毎日が、今日と同じ楽しい日が続くのだから」

「今日と同じ毎日なんて有るわけねえし、そんな毎日ずいぶん退屈だろうぜ」

コナンの皮肉な言葉に動じることなく哀は話し続けた。

「そして、ここの住人は、仲間を増やしたくてたまらない。

だから、あなたの親しい人たちの姿を借りて、色々と探索の邪魔するでしょう。

管理人たる白ウサギは、探索の妨げは許されないけれど、こっさり邪魔するかも。

用心する事ね。

それから、この国で物を食べたりのんだりしない事。

夢の国の物を体の中に入ればその分、現実が失われてしまうのよ」

そう言いつつ、哀は再びブリオツシュをつまみ、ココアを飲んだ。

甘い香りにコナンは空腹感を覚えた。

その心を見透かしたかのように哀は言った。

「ここでの空腹感も渴きも幻よ。」

あなたの体は現実では眠っているだけなの。

ここでいくら空腹を感じたところで命にかかわる事は無いわ。

我慢するのね」

「分かったよ。」

でも、灰原、お前いくらなんでも甘い物食べすぎじゃないか」

哀はこれ見よがしにブリオツシュをほおばった。

「糖質は、脳細胞の大切なエネルギーよ。」

だから、私の灰色の脳細胞を活動させるためには充分な量が必要なの」

「ああ、そう」

コナンは返す言葉を失った。

哀はブリオツシュを飲み込むと指を舐め始めた。

コナンはその姿を見つめているうちにふと、思いついた。

「おい、灰原」

「チエシヤ猫よ」

「あー！分かったよ、チエシヤ猫。

キッドが俺から盗った”想い”って一体なんなんだ。」

「あなたの大切な心。

それが無ければあなたがあなたでなくなってしまう物のうちの一つよ」

「でも、俺は何も変わっちゃないぜ」

コナンは確信をもって言い切った。

哀は首を横にふった。

「白ウサギはそれを本人にわからせるようなヘマはしないわ。

それと、あと一つ重要な事がー」

「こん、ドラ猫なにさらすかー!!」

哀が言い終わらぬうちに大声が響き、黒い物体が飛んできた。

哀は信じられぬほどのすばやさでジャンプした。

哀がいた場所に、黒いかたまりは当たって、大きな音を立てた。

コナンが上を見上げると、天窓から茶色の尻尾がちらりと覗いて消えた。

コナンは足元に転がった物を拾い上げた。

見覚えのあるものだった。

「黒衣の騎士のマスクじゃねえか。何でこんな所に？」

コナンの背後の通路から黒衣の騎士がテーブルに駆け寄った。

「ああ、喰いもん、全部持ってかれてしもった」

悔しそうに言う人物にコナンは声をかけた。

「おい、お前までなんて格好してるんだ、服部」

## 夢の章 4・公爵夫妻

黒衣の騎士の格好をした平次はコナンの前に立った。

「なにいうとんねん、アリス。俺は公爵やで」

”公爵だつてえ。がらじゃね〜。

さすが、夢の国と言っただけある”

コナンは思った。

「ど〜でもいいけど、俺の事アリスって呼ぶのはやめてくれねえか。物語の名前で呼ぶなら、ホームズは恐れ多いから、ウィギンズとか小林少年とか」

「なに言つてんねん。

胸にちゃんとアリスって書いてあるやん」

平次の指差す方を見る。

自分の服の襟元にキッドが出したエーデルワイスの花がくつついて  
いる。

むしり取ろうとするが、無駄だった。

「だから、なんでこれで俺がアリスなんだ」

「これはエーデルワイスや。

アリスは、元々ドイツ語のアーデルハイトからきた名前や。

そしてアーデルハイトは、エーデルワイスからきた名や。

せや、アリスが嫌ならハイジって呼んだるか？」

「ふざけるなよ。俺の名は工藤新一だ。

お前だつて知つてるはずだろう」

「けど、お前はここのもんになるんやろ。

エーデルワイスの意味は高貴な白や。

新しゅうなつたおまえにぴったりやろ」

そう言つと平次は笑顔を見せた。

コナンはなぜか背筋に冷たい物が走るのを感じた。

”この笑顔、キッドと同じ！”

「いつてー！なにすんねんこのガキ！」

飛び上がったコナンに力いっぱい顔を引っ張られた平次は大声を上げた。

「なに騒いどるの！」

ドレス姿で現われた和葉を見たときコナンは奇妙な失望感に囚われた。

同じドレスを着て自分の前に現われるのは、和葉ではなかったはずだ。

”誰が現われると思っていたんだろう”

コナンは考えて、園子だと思い出した。

しかし何かしつくり来ない。

和葉がテーブルの上を見て悲鳴に似た声を上げた。

「アー！おやつが・・・」

「お前が天窓開けてるさかい、ドラ猫に全部やられてしもうたわ」

「なんやて、私のせい、ゆうんか！」

コナンなど眼中に無い二人のやり取りがしばらく続いた後、和葉が言った。

「どうや、このドレス」

くるりと平次の前で、すそを翻し一回転する。

平次は、一見気の無い様子で答えた。

「馬子にも衣装”って感じでイケてるやん」

再び、コナンは妙な感覚に襲われた。

同じ様な会話を、文化祭の時、園子とした、と記憶は言っているが、どうしても、違和感が拭えない。

なぜだろう、と考えている途中、頭上から平次の声が聞こえた。

「おい、アリス、お前これから、城へ行くんやろ」

「へっ？城？」

「そうや、ハートの女王様主催のサッカー大会があるんやで」

和葉はコナンの横にかがみこんで言う。

「そうそう、いいプレーしたら、女王様の御婿さんになれるんや。」

コナン君、どうや？ハートの女王様、とっても、かわいいんよ」

「いや、僕、まだ、若いから・・・」

作った笑顔でコナンは応えた。

そして、表情を改めて、平次に話しかけた。

「なあ、服部」

「公爵やて」

「分かったよ。公爵。」火と水、風と土の集う場所”ってどこだと思っ

まるで、考えるそぶりも見せず、平次は、答えた。

「知らん。おっと、時間や。もう出発せにや」

平次と和葉は二人外に出た。

コナンは、早足で歩く二人の後を、必死でついていった。

二人は玄関先に止めてあつたバイクにまたがった。

「ほな、行ってくるで」

「おい、ちよつと待て。」

俺は捜さなけりやならない場所があるんだ。

途中まで乗つけていけよ」

「アホ、3人乗りは交通違反や。

ハートの女王様に首ちょん切られてしまうわ。

もう一台バイクが裏にあるから、使いや」

「この体で、乗れると思うか？」

「それやったら、中にええもんがある。じゃ、がんばり」

エンジン音とともに、平次と和葉はコナンの視界から消えていった。

コナンは周りを見回した。

ここは森の中の空き地に建つ一軒家だった。

木々に、視界は遮られその先に何があるのか見当がつかない。

”とにかく、この森を出ない事にはこの国にどんな場所があるのかさえ分らない”

コナンは裏に回ってバイクを見た。

しかしどうやっても子供の体では動かせそうにない。

あきらめて家の中に入るとテーブルの上にガラスのビンがある。

” さつきは、こんな物なかったのにいつの間に ”

ビンには白い紙が貼ってありこう書いてあった。

『私をお飲み』

白い紙の下には赤ラベルに白い字で「白乾児<sup>バイカル</sup>」と書いてある。

コナンはビンを眺めてしばらく考えこんだ。

” これで、元の体に戻るのかなあ。

夢の世界だって言うから可能性は高いかも。

まあ試してみるか、このままじゃ、らちがあかねえ ”

コナンは白乾児を何口か飲んだ。

” 体が熱い！心臓が！ ”

コナンの意識は闇に包まれていく。

その時、遠くからかすかに哀の声が聞こえたような気がした。

” ここでは、食べたり飲んだりしない事ね ”

## 夢の章 5・毛虫

コナンはゆっくりと意識を取り戻した。

自分の手を見る。大きい。

立ち上がると、壁の鏡に自分の姿が映る。

「16・7歳くらいの体か。これならバイクに乗れそうだ」

コナンはつぶやいた。

頭の中に唐突に言葉が浮かぶ。

”元の体に戻れた”

コナンは自分の考えを不思議に思った。

”これが俺の元の体だ？そんなはずはねえだろう。

俺の体は7歳・・・いや本当は、どうだったんだ？”

考えがまとまらないうちに、また、急に体が熱くなってきた。

”冗談じゃねえぞ。また・元・に戻っちまったら”

しかし、意識は再び遠のいていった。

気がつくと、体が大きくなっていた。

成長ではない。

『元』の体に戻ったまま、巨大化である。

我ながらなんて情けない格好だろう。

家から頭と手足を突き出したまま立ち上がれない。

体を何とか動かして家を壊してみようとするが、壁はびくともしない。

「ほっ、ほほう。困っておるようじゃの、アリス。」

家の前にいつの間にかキノコが生えている。

その上に、よく知っている人物がパイプをくわえている。

背中に何かしよっているようだが良く見えない。

「阿笠博士」。俺の名は江戸川コナンだって言うの」

「ほっ、しかし、君は間違いなくアリスじゃ。」

どこから見てもアリスじゃ。

わしが毛虫じゃというくらい、間違いないぞ」

「毛虫？博士が？どっちかっていえば芋虫・・・」

コナンは博士のつるりとした頭を見て吹き出した。

博士は気を悪くした様子で言った。

「なにを言うか。この毛を見なさい」

博士は豊かな口ひげをひねり上げた。

「この見事な毛。これで毛虫と言わずしてなんと言う」

「分かったよ、博士」

「毛虫じゃ」

「はい、はい。じゃ、毛虫さん。」

「どうやればこの体元に戻るか知ってるかい」

「そりゃ簡単じゃ。キノコの片方を食べれば大きくなる。」

片方を食べれば小さくなる」

コナンは博士の座るまん丸なキノコを見つめた。

「あの、片方ってどっちが、どっちの方？」

「それはの」

そう言いながら博士はパイプに火をつけた。

と、背中の中から煙と火が上がった。

博士は、背中にしよったロケットとともに空の彼方に消えていった。

コナンは仕方なく手を伸ばし、キノコを取ってみた。

真っ赤な地色で、白い斑点がついている。

毒キノコのベニテングダケそっくりである。

「毒・・・、じゃねえよな。」

本当のベニテングダケにしてはサイズが馬鹿でかいし。

元の体だったらでっかい木くらいの大きさだよ」

コナンは独り言を言いながらキノコを半分に割った。

とりあえず、片方を少しづつ食べてみるが、何の変化も起こらない。

結局、全部食べ終わったところで急激な変化が起こった。  
体が再び巨大化する。家に体が締め付けられる。

慌ててコナンはもう半分のキノコを全部口の中に放り込んだ。  
体中が熱くなり、コナンは再び意識を失った。

気がつくと、コナンは、廃墟の中に座り込んでいた。

「わー、やべー、これ俺のせいだよな、きっと」

コナンはつぶやきながら立ち上がった。

裏に回ってみると、バイクは残骸と化していた。

「どうする？とりあえず公爵を追ってみよう。」

この国の事、詳しく聞いてみないと。

それにしても、歩かなきゃならないのか」

ため息とともにコナンは”平次”達の去った方に歩き出した。

## 夢の章 6・分かれ道

森は緑。草は青い。

暑過ぎる事も無く、風は爽やかだった。

歩く事は、思ったよりずっと気持ち良かった。

ともすれば、コナンは、自分の目的を忘れそうになっている事に気づいて愕然とした。

”チェシャ猫は言っていたっけ。

長くここにいと帰れなくなるって”

どのくらい歩いただろうか。

分かれ道にやって来た。

六分岐、いやそれ以上に道が分かれている。

その分岐点に枝の広く垂れた大きな木があった。

木の幹には、様々な矢印がついている。

しかしどれ一つ道のほうをさしている物が無い。

コナンは矢印の文字を読んで見た。

「ベーカー街221B。プライド探偵事務所。

ハムレット荘、プルトニービル、スタイルズ荘

コーシイ島、うへっ、ロウフィールド館」

まだまだ続くがコナンは読むのをやめた。

どれも探偵事務所の所在地か、殺人事件のあった場所ばかりだ。

「一体、どこに行ったらいいんだ」

さすがに疲れを感じたコナンは木の下に座り込んだ。

ふと腕時計型麻醉銃が目に残った。コナンは考えた。

”ここは夢の中だとチェシャ猫は言った。

だったらここで眠ってしまえば現実に戻れるんじゃないか”

コナンは自分に向けて麻醉銃を発射しようとした。

そのとたん頭の上の枝が大きく揺れ逆さまに人が降って来た。

いや、ぶら下がった。

「驚の身を逆さまに初音かな」

その人影はそう言った。

コナンは驚きのあまり声も出ない。

「アリス、さつきね、公爵に邪魔されていえなかったけど、この世界で眠ってしまえば現実うつしよに戻れなくなるから注意してね」

「チ、チェシャ猫。眠るどころかシヨックで永眠しちまうところだつたぞ」

コナンは、やっと口がきけるようになって、叫んだ。

”哀”は、ふわりとコナンの前に降り立った。

「きちんと、ルールは説明しておかないとね、アリス」

「アリスってねえ、俺の名は江戸川コナンだ！」

”哀”の黄金きんの瞳の中に、

何かを面白がるようなきらめきが宿ったのをコナンは見た。

「アリス、何か食べた？」

「食べる？」

白乾兎飲んでキノコ食っただけ。たいした量じゃない」  
「なるほどね。」

でもまだ”アリス”とは呼ばれたくないのね。

まあ、”江戸川コナン”も一種の夢の名前だから、まだ”持ってるのね」

”哀”の言葉の意味を聞こうとするコナンより先に”哀”が聞いた。

「で、これからどうするの？」

「もちろん・・・を、白ウサギを探す！」

コナンは一瞬言葉が出なかった自分に、愕然とした。

”俺から何かを盗った奴。

あいつの名前は白ウサギじゃなかった。

でもそれ以外の名前が思い浮かばない”

コナンは”哀”に詰め寄った。

「おい！チェシャ猫！あいつの名前はなんていうんだ！」

「誰？」

「俺から、何かを盗っていった奴だよ」

「白ウサギ、よ。アリス。私がチェシャ猫というのおんなじで」

コナンは、まじまじと目の前の”哀”の姿を見つめた。

”そう言えば、こいつもチェシャ猫じゃなかったはずだ。

まさか、俺、忘れちゃってるのか？”

コナンは身震いした。

早くここから出なければ何が本当で何が夢か分からなくなってしま  
いそうだ。

「おい！チェシャ猫！白ウサギはどこにいるんだ！」

うつすらとした笑顔を浮かべて”哀”は言った。

「『火と水、風と土の集う場所』」。

教えてあげたつていいけど、あなたが自分で見つけられない限り  
あなたは決してそこにはたどり着けない」

コナンは”哀”から情報を得るのはあきらめた。

話をきけばきくほど混乱する。

コナンは、それぞれの分かれ道を注意深く観察し始めた。  
そしてやっと一本の道の側で求める物を見つけた。

木の幹に小石が当たったような新しい傷がある。

木の枝の先にも最近折れた跡がある。

「多分、この道をバイクで通ったんだ」

コナンは歩き出した。その横に”哀”もついてくる。

「おい、何でついて来るんだ」

「私もこちらへ行くのよ。」

三月ウサギの御茶会に招かれてるの。

『きちがいじゃがしかたない』けどね」

「おい・・・まさかこの道『獄門島』に通してるんじゃないだろうな」

”哀”は笑ってコナンを追い越し、歩き出した。

## 夢の章 7・幻影

道は次第に細くなってきた。

そのせいで、バイクで草を踏み敷いた後は、はつきり見える。

この後を付いていけば迷う心配はなさそうだと、コナンは思った。

目の前の道を横切つて、妙な生物が数匹飛んで横切った。

太いウイナーに小さな頭と細い尻尾がついたような形だ。

「おい、ツチノコだ！」

驚くコナンに対して「哀」は気に止める様子も無く言った。

「あなたが、見たいと思っていたから出て来たのよ」

「俺は別に……」

「いや、ちよつと見たくないわけでもなかったかな？」

そう言えば前、学校で歩美ちゃんと……誰だ？

チエシヤ猫？そんなバカな！けれど歩美ちゃんはチエシヤ猫と話をしていた。

『ツチノコ……さんも見たいでしょう？』

コナンの思考は「哀」の声で途切れた。

「私は、ツチノコより人面犬の方が見たいけどね」

コナンは返す言葉を見つけようとしたが、別の声に遮られた。

「おい、チエシヤ猫さん」

木の上からの声にコナンは枝を見上げた。

「ぬ、沼淵、なんでー」

コナンの声に重なるように「哀」は言った。

「あら、ハンプティ・ダンプティ。どうしたの？」

「ハンプティ・ダンプティは、枝の上じゃなくて、塀の上に座ってるんだし、

そもそも、体格がまるつきり逆じゃねえか」

コナンは内心そうつぶやいた。

骸骨と大差ない体格の沼淵は軽々と枝から飛び降りた。

「チエシヤ猫さん。新しい友達かい？」

笑いかける沼淵の顔には何の屈託も無い。

コナンのほうはそうはいかなかった。

この男に危うく殺されかけた過去がよみがえる。

沼淵は不思議そうに言う。

「坊、怖い顔してどないしたんや？汗かいて、暑いんかい？」

” 冷や汗だよ ”

コナンは口の中でつぶやいた。

「せや、きつと喉が渴いてるんやろ。

ええとこ、連れてつたるわ」

沼淵は先にたつて叢の中へ分け入っていく。

” 哀 ” もその後を付いて行く。

コナンは躊躇したが、何か白ウサギの手がかりがあるかもしれない  
と思い直し、付いて行く事にした。

ほどなく、水音が聞こえてきた。

「ほら、見てみ」

沼淵が言った。

木漏れ日を砕きながら、小川が草の中を流れている。

沼淵は川のほとりの大きな笹の葉を、くるりと器用に巻きコップを  
作った。

それで川の水を汲むとコナンに差し出した。

「さ、飲んでみ。ごつつう、うまいで」

コナンは躊躇した。

” この世界で食べたり、飲んだり・・・ ”

” 哀 ” の声が脳裏によみがえる。

沼淵はコナンのためらいを見て、寂しそうに言った。

「やっぱ、俺がこんな骸骨みたいやから、うす気味悪いんやね」

コナンは、沼淵の手から、コップを取った。

いくら殺人犯とは言えこんな悲しい顔されては断れない。

” それに、水の一杯くらい大した事無いさ。 ”

コナンが水を飲み干すと沼淵は笑顔になった。

「坊、うまいやろ。もう一杯どないや？」

「ありがとう」

何杯か、コップを空にした後、コナンは満足の吐息をついた。

「美味しかった。ただの水がこんなに美味しいなんて知らなかったよ」

沼淵はうれしそうにうなずいた。

「せやろ。ワシの友達もここが大好きなんや」

そう言いながら沼淵は視線を遠くにさまよわせ、何かを探すようにコナンから離れた。

「ともだち・・・」

せや、ワシは皆からうす気味悪がられてひとりぼっちやった。せやけど、友達がおったんや。

川のほとり・・・

誰やったんや、ワシの友達・・・」

”哀”は足音も立てず沼淵の前に歩み寄った。

沼淵は”哀”の前に膝まずいた。

”哀”はその頬に片手を当てていった。

「思い出してきた？ハンプティ・ダンプティ。  
現実うつつの事を。」

「チエシャ猫さん、ワシ、ここで楽しい。

いつまでもこの森で遊んでいたいんや。」

”哀”は沼淵のすぐるような視線から目をそらした。

「時間がなくなったのよ。

あなたは遠くへ行かなくてはならないの」

「嫌や！ワシはここに居るんや！」

いきなり沼淵は”哀”の首を、両手で締めた。

勢いで”哀”は後ろに倒れ体が小川に沈んだ。

コナンは”哀”を助けるため、沼淵に飛び掛ろうとした。その肩に小さな手を置くものがある。

振り向くとそこに”哀”がいた。

「お、お前？」

コナンは沼淵の方に視線をやった。

沼淵は小川のほとりで呆然と膝をついて、水の上に立つ人影を見つめていた。

「白ウサギ！」

声を上げて駆け寄ろうとしたコナンは”哀”に腕をつかまれた。力をいれてつかまれているわけではないのに、振りほどけない。

「だめよ、アリス。今はハンプティ・ダンプティと彼の時間よ」

「どういうことだ、一体」

「『夜』が来るわ」

”哀”の言葉と同時に、コナン達の周囲は暗くなっていった。

小川の上の”キッド”が、ほの白く浮かび上がる。

その”キッド”からの薄い明かりに照らされて、沼淵の姿が見える。

「白ウサギさん・・・」

沼淵はつぶやくように言った。

「最期の時が、来た」

”キッド”のその声は、もの静かで柔らかかった。

「楽しい夢だったかい、ハンプティ・ダンプティ」

「楽しいよ、もっと夢を見たいよ、白ウサギさん」

”キッド”は首を横にふった。

「お前の、夢の時間は終りだ。」

短い間だったが、充分”想い”は楽しませてもらったよ。

さあ、最初に出会った約束のとおりお前に”想い”を返そう」

「あんた最初に会ったとき言いよったなあ。」

「”想い”を自分に預けてくれるなら、

お前が生きている限り現実から逃がしてあげよう」って。

じゃあ、ワシは死ぬって事か。

恐ろしいわ、白ウサギさん。堪忍してや」

”キッド”はどこか悲しげな微笑を浮かべて沼淵に言った。

「一人で逝くのではない。」

お前の友達が、お前の行くべき所に連れて行ってくれる。さあ」

”キッド”はゆっくりと、大きく両腕を広げた。

小川の流れにきらめく光が、

青く明滅する小さなともし火となって、沼淵の周りにいくつも寄ってきた。

沼淵の顔が恐怖から歓喜に変わった。

「そうや、思い出した。ワシの友達。」

こいつらだけがいつもワシの側にいてくれよったんや！」

沼淵は立ち上がった。

小川の水からは次々と蛍が生まれ、沼淵の側によっていく。

やがて、蛍の光の中に、沼淵の姿は見えなくなった。

”キッド”が指を鳴らした。

蛍は一度ぱつと散り、そして二重螺旋の光の帯となって上空へ上がっていき見えなくなった。

沼淵の姿はもうどこに無かった。

「おい、白ウサギ、・・・を、ハンプティ・ダンプティをどうしたんだ」

”キッド”はコナンのほうへ向いた。

「彼は逝った。友達とともに。私たちが決して行けぬ所へ」

「私たち？」

「チエシヤ猫と私だ」

「またわけのわからない事を！」

とにかく俺から盗った物を返せ！」

「それは最初に言っただけだ。」

私の”居る”所まで来る事が出来たら返す、と。

しかし、君の想いは本当に美しい。

出来る事なら、ここの住人になって、長くその想いを私に楽しませて欲しいよ」

「何だと！」

コナンは”キッド”の側に駆け寄ろうとした。  
その時、突風が吹いた。

”キッド”の体はガラスのようにこなごなに砕け、風に吹き散らされ消えた。

光がさした。

あたりはすっかり昼間の明るさである。

コナンは自分が何をしているのか分からなくなっ  
てあたりを見回した。

後ろの木に、相変わらず皮肉めいた微笑を浮かべたチェシャ猫が  
もたれかかっている。

「お、俺、何をしようとしてたんだっけ」

「あなたが、何をしようとしていたかなんて、私が知るわけ無いで  
しょう」

予想通りの答えだった。

夢を見ていた気がする。

とても重要な夢だった気がするのだがどうしても思い出せない。  
考え込んで動かなくなったコナンに”哀”は言った。

「私、三月ウサギのところへ行くわよ」

そして、コナンを振り返りもせず、歩き出した。

コナンは思い出すのをあきらめて”哀”の後を追った。

## 現実（うつしよ）の章 2・病室

哀はコナンのベッドの横に腰をかけていた。

コナンは病院についてしばらくの間は

名前を大声で呼べばまぶたを少し動かしていた。

しかしその反応も次第に弱くなり、

今は痛みを与えて、初めてかすかに体を動かす程度になっている。

頭はもちろんの事、全身の検査を試みたが異常は発見できなかった。

しかし、反応が徐々に鈍くなっている所からして、何らかの病変がコナンの中で進行しているのは間違いない、と哀は思った。

医師達の説明も同じであった。

だからといって今は打つ手が何も無かった。

とりあえずは、生命の危機はなさそうなので、

一晩様子を見て、明日もう一度検査を試みようというのが医師達の方針だった。

毛利探偵は、どうしても外せない仕事のため、夜はおらず、

蘭は試合の遠征で不在だった。

そのため、今晚は阿笠博士と、哀がコナンに付き添うことになった。

コナンの容態が落ち着いているので、

蘭には知らせずにおこう、という話になっていた。

コンビニの袋を下げて阿笠博士が入ってきた。

「さあ、哀君、夕食じゃ。食べたくなくとも食べるんじゃぞ」

哀の気持ちを見透かす様に博士は言った。

哀はポツリと言った。

「アポトキシン4869のせいかしら」

「なんじゃと？」

「あの薬は神経組織を除いたすべての細胞を幼児化させたわ。」

でも神経細胞に作用しないと言い切れるかどうか」

「しかし考えてごらん・新一が薬を飲んでから時間がたつておる。副作用にしては遅すぎやせんか。」

それに哀君、君も同じくすりを飲んだんじゃろっ」

「遅く出現する副作用を持つ薬はあるわ。」

それに、工藤君は2回も不自然な形で元の体に戻ってる。

それが原因で神経系に遅発性の取り返しのつかないダメージを与えているのかもしれない。」

阿笠博士は哀の頭に優しく手を置いた。

「心配せんでも良い。」

きつと新一はほどなく目を覚ます。

哀君、これっぽっちも君のせいではないぞ」

「目を覚まさなくてもいいわ」

ポツリと哀は言った。

「なんじゃと！」

「目覚めなければきつと組織は彼を殺さない。」

だって、証言できないもの。

そしたら、私は工藤君が殺されるのを見なくて済むわ」

その時ノックの音がした。

哀は身構えた。

阿笠博士が声をかける。

「誰じゃ」

意外な答えが返ってきた。

「群馬県警の山村です。よろしいでしょうか？」

「山村刑事？さあどうぞ。一体どうしたんじゃ？」

入ってきたのは、確かに山村刑事だった。

「ああ、やっぱり、あの坊やが入院してたんですね。」

ナースステーションで『江戸川コナン』って、名前を見て

もしかしたらと思って来て見たんです。

いったいどうしたんですか？彼」

「学校で、頭を打つての。」

怪我は無いんじゃないが目を覚まさんので様子を見とるんじゃない。  
それより山村刑事。

お前さんこそどうしてこんな所に？」

山村刑事はコナンに聞かれるのを恐れるように声をひそめた。

「実は先ほど沼淵が、亡くなりまして」

「なんじゃと」

「大阪にまた護送する所だったんですよ。」

車の中で急に頭が痛い、気分が悪いと騒ぎ出して。

あんまり大げさなので、最初は仮病かと思ったんです。

でも急にケイレン起こして気を失って。

一番近くにあったこの病院に運ばれたんです。

それが昨日の事でして、で、目を覚まさないまんま先ほど・・・。

なんか嫌ですよ、僕。

前に逃げられた事あるから、頭痛いつていつても信じてやれなくて・・・。

すぐに病院につれてってやれば」

「彼は、長いこと頭が痛いつていつていたの？」

哀に質問され山村刑事は不思議そうな顔をしたが答えた。

「いや、ほんの2・3分、か5分か、とにかくあっという間に倒れちゃったんだ」

「では、山村刑事。あなたが気にする事など何も無いわ。」

きつと以前からあった脳動脈瘤が破裂したのよ。

これは誰にも予知できないし、病院の中で倒れたとしても、

同じ結果になった可能性が高いわ」

「君はどうしてそんなこと知ってるの。」

それ、ここの先生に言われたそのまんまだ」

そういう山村刑事に阿笠博士は慌てて言った。

「この子は天才科学者のわしと一緒に住んでおつての、  
そのせいか、妙な事を聞き覚えよって」

「門前の小僧って奴ですね。」

それにしても沼淵の奴、時効を入れれば4人も殺してるんですが  
なんか、哀れでしてね。

よもやま話したんですが、それ聞いてると僕だって

一歩間違えてたら奴みたいになっただかも、って思っんですよ。

奴は、家庭的に不幸でして、その上”ガイコツ”なんて皆にいじめられて、

学校でも家でも一人ぼっちでずっとやって来たそうです。

僕も、”ネズミ男”なんてけっこういじめられてたんです。

でも、自分でいうのもなんですが家族が妙に能天気な連中でした。ね。  
家に帰れば楽しくて。

僕には、癒してくれる人たちがいたけど、奴にはいなかった。

そして、僕は刑事、奴は死刑囚。

護送中、最期の言葉になるなんて思ってもみなかったんですが、奴  
が言っただんです。

『叶わん事やが、あの森で、ずっと暮らせたらな。』

もう一度、あそこに帰りたいな』

奴に殺された人たちだって

もう一度やりたい事はたくさんあったのは確かな事なんですけど・・・  
どうも・・・」

山村刑事は目を押さえた。

阿笠博士は山村刑事の肩に手を置いていった。

「人間誰しも、身近な人のほうに心動かされるのは仕方ない事じゃ。  
それに、あんたは平等であろうとしておる。

立派な事じゃ。その心を忘れん様にしてくれよ。」

泣きながら、うなずいた山村刑事は言った。

「奴の死に顔は、本当に穏やかでした。それが救いです」

哀は、二人の話を聞きながら思った。

”私の死に顔はどうなんだろう。きっと恐怖にゆがんでるわね”  
哀はコナンの側に再び座った。

”お姉ちゃんを失い、私を守ってくれるといってくれた人は、無力になり、

こうして横たわっている。

私は、きつと、たくさんの人を、守る事も出来ず巻き添えにして死なしてしまふ。

そして最期は、たった一人で死んでいかなければならないのね。

私は、恐い。恐くてたまらない。

でも、生まれた時から組織の人間で、何の疑問も持たず、研究を進めて、

結果、多くの人の命を奪った私にとっては、ふさわしい罰。

いえ、むしろ、過ぎたほどの、幸運な罰かも。

だって、私の醜い死に顔を、工藤君に見られなくて済むもの”

哀はコナンの力のない手を握り自分の頬にあてた。

”工藤君、私もう一つあなたがこのままでいて欲しいわけがあるの。

私、あなたが蘭さんの名前を呼ぶのを聞くのがつらいのよ。だから・  
・。

きつと、あなたがいないと組織はきつとすぐに私を見つけて殺すでしょう。

それまでの短い間ずっとこうして私のそばにいて欲しい”

哀は目を閉じてコナンの手のぬくもりを感じていた。

## 夢の章 8・三月ウサギのお茶会

森の小道を抜けると、大きな、かまぼこ型の屋根に、これまた大きなウサギの耳のついた家が見えてきた。

”哀”はコナンを無視して、門を開け庭の方に入っていく。

庭には、大きなテーブルと、いくつもの椅子。

そしてテーブルの端に座っているのは……。

「帽子屋が光彦、三月ウサギが元太、二人の間にはさまれて、酔っ払って寝てるのが、ネムリネズミのおっちゃんって所か」

コナンはつぶやいた。

光彦も元太も黒のシルクハットに蝶ネクタイと三つ揃いである。

元太の帽子からはウサギの耳がはみ出している。

小五郎は、いつもと同じであった。

「おや、アリス。来てくださったんですね」

光彦がいきなりコナンに話し掛けた。

「アリス、アリスって、なんで俺の事そう呼ぶんだ」

コナンが口を尖らせて言うと、光彦は驚いたように答えた。

「だって、アリス。ほら、ちゃんと襟元に名前が」

指差すのは、あの、エーデルワイスの花である。

コナンは腹を立てて、それをむしりとろうとしたが、やはりびくともしない。

「何で、取れねえんだよ、これ」

「ちゃんと、アリスの名が自分の物になれば消えてなくなるわよ」

謎めいた微笑を浮かべこたえる哀に、コナンは何か言い返そうとした。

しかし、光彦に、邪魔された。

「さあ、アリス。今日は、たっくさん、食べていって下さいね」

コナンは無理やり椅子に押し込まれた。

「おい、光彦」

「はあ？、私は由緒正しき帽子屋ですよ」

またかよ、とコナンは思った。念のため、元太にも呼びかけてみる。

「おい。元太」

「俺は、三月ウサギだぜ。アリス。うな重食うか？うまいぞ」

「そうそう、チェシヤ猫さんのためには『五鉄』の軍鶏なべも用意したんですよ。」

「お好きでしょう？」

光彦は”哀”のために椅子をひいてやる。

コナンはテーブルを見回した。

うな重に、鍋、紅茶セット、果物鉢。

その中には、林檎が1個、バナナが一本、葡萄が一房、オレンジが1個。

それに梨が3つ。

そのうちの、2個は金色に熟して硬く、1個は表皮に茶色の斑点があった。

そして、いくつかのコップの中には白い液体。

コナンは、数個のコップの中身の匂いをかいで見た。

どれも卵酒のようだ。

しかし、バニラの香りの物と、ナツメグの香りの物がある。

光彦がこともなげに言う。

「ああ、アリス。ご存知だとは思いますが、ナツメグの香りの卵酒には、

ストリキニーネが入ってますからね」

コナンは、危くコップを取り落としそうになりながらも、テーブルの上に置いた。

かろうじて平静を保ちながら、光彦に聞いた。

「ってことは、3つの梨のうち傷んでる奴に

塩化第2水銀が注射されてるわけか」

光彦は満面の笑みを浮かべて答えた。

「さすがよく御分かりですね。亡くなった伯母もさぞ喜んでいて

しょう」

「あら、エミリー・ハッターはあなたの伯母さまだったの？」

”哀”が聞くと光彦は首を横にふった。

「いえいえ、正確には私の祖父の兄の娘のイトコの叔父の・・・」  
長々しい血縁関係の説明が続いたがコナンは聞いていなかった。

”お茶会なら、バートラムホテルのアフタヌーン・ティーみたいな献立がいいなあ。

なんで、「Yの悲劇」に「鬼平犯科帳」な、献立なんだよ。  
でも、軍鶏なべもつまそうなにおい。

なんか、本当に腹へって来たぞ。

ずいぶん歩いた割にはほとんど喰ってねえ。

口にしたのは白乾<sup>バイカル</sup>児にきのこ、水・・・、

あれ俺、水なんて飲んだっけ、いや飲んでないな”

コナンの考えを見透かしたように元太が言った。

「喰っていけよ。無理なダイエットは子供にはよくないぞ」

「かいがいしく”哀”になべをよそおっている光彦も言った。

「そうですよ、アリス。

うなぎがお嫌いなら軍鶏なべもたくさんありますよ」

コナンは目の前に出されたうなぎ重を見つめつばを飲み込んだ。

うなぎの焼き加減といい、白くふつくらとしたご飯といい、

今までに見たことの無いほどの美味しそうなうなぎ重である。

何より、空腹感が胃を締め付ける。

何か食べない事にはこの先一步も動けないような気がした。

”チェシャ猫はああいったけど、腹が減ってはいくさが出来ぬ、  
つて言っし。

それに現実が俺の中からなくなるって、

俺が現実の事を忘れてしまっって意味だろ。

俺は別に何も忘れてなんか無いよな”

そう思いながらコナンはうなぎ重を一口食べた。

「うまいだろ、湊屋のうなぎだぜ。」

そう言いながら、元太は空になった重箱を脇にのけ、どこからとも無く次のうな重を取り出す。

「さあ！どんどん喰うぞ！」

元太の喰いっぷりにつられ、コナンもあっという間に重箱を空にしました。

「お茶ですよ」

”光彦”が湯飲みを持ってくる。

「帽子屋は気が利くなあ」

コナンはお茶を飲んで言った。

”光彦”はコナンのほうに身をかがめ、

軍鶏なべを熱心についついている”哀”の方を横目で見ながら言った。

「ね、アリスはチェシャ猫さんと、どんなご関係ですか」

「関係って・・・」

「つまり、えっと、チェシャ猫さんってミステリアスで素敵だなんて思いませんか？」

コナンは、また奇妙な感覚に襲われた。

これと似た会話をどこかで帽子屋とした。

公園の中だったろうか。

それとも山の中？

「なあ、帽子屋。

前、同じような話、どこかでしなかったっけ？」

”光彦”はきょとんとした顔で言った。

「まさか。アリスとお会いするのは初めてです」

突然、木々が大きく揺れ、何か大きな動物がコナン達の頭をかすめて飛び去った。

コナンは慌てて地面に伏せ頭を上げて飛び去った物を見た。それは、上空で方向転換し再びこちらに向かってくる。

「龍だ！」

コナンは思わず叫ぶと飛び起きた。

何か蹴る物を探すが適当な物は何も無い。

「ちきしょう！何か武器になる物は無いのかよ！」

「武器？これの事か？」

”元太”から手渡された物を見てコナンは絶句した。  
それはマンドリンだった。

「三月ウサギ」。こりや、楽器だ！」

「え？これ鈍器じゃねえのか？」

「違ーう！俺が欲しいのは楽器でも鈍器でもなくて『武器』！」

「あ、でもエミリー伯母さんはまさしくこのマンドリンで殴られて命を落とされたんですよ」

平然と”光彦”は言った。

コナンは引きつった笑みを浮かべて自分の手にするマンドリンを見つめた。

再び、風が強くなる。

気を取り直してコナンはマンドリンのネックを持って振り上げた。

そのコナンの手を誰かが押さえた。

「なにすんだ、チエシャ猫！」

「それはこっちのセリフ。何怖がっているの。」

あれはジャバウォッキのゴロちゃんよ」

「ゴ、ゴロちゃん・・・？」

近づいてくる恐ろしい姿と、名前の落差にコナンは一瞬呆然とした。

ジャバウォッキのゴロちゃんは、

羽を二、三度大きくはばたかせると、芝生の上にゆっくりと着地した。

その背中から降り立った人影を見てコナンは思わず一步下がった。

”やべー！怒られる”

とっさに浮かんだ考えをコナンは不思議に思った。

「おひさしぶりね。帽子屋さん。」

ゴロちゃんは、まだ着陸がうまく出来なくって。

お茶会の邪魔をしてしまいましたね」

「いいえ、御気になさらずに、ダイヤの女王様。」

ネムリネズミさんを、お迎えで？」

ダイヤの女王を見つめながらコナンは考えた。

”会った事は無い・・・はずだ。”

でも、何で見覚えがあるんだろう”

美しいドレスのすそをひきながら、”英理”は”小五郎”の側に近づいた。

その気配に気づいたのか、”小五郎”は目を開いた。

「うわー！ヴィッキー！」

その言葉に”英理”の眉がピクリと動いた。

いきなり”小五郎”のの襟首をつかんで立ち上がらせると、

法廷で聞けばさぞ響くだろう声で言った。

「デイク、私はね、ヴィクと呼んで欲しいの」

その言葉と同時に見事な一本背負いが”小五郎”の体を中に舞わせ  
た。

「この人のおかげで手に入れたものといえば、この一本背負いだけ  
だわ」

”英理”のつぶやきに、コナンは何か引つかかる物を感じた。

「待ってよ、おばさん！まだ、もう一つ何かあるはずだよ！」

”英理”の美しく弧を描いた眉がかすかに上がった。

コナンは、また一歩後ずさった。

しかし、”英理”は笑顔になってコナンの前に膝まずいて言った。

「アリス、私はダイヤの女王よ」

「は、はい。女王様」

コナンは、何とか、もう一歩後ずさりしたくなるのを抑えて言った。

「おい、ネムリネズミの奴、また寝ちまったぞ」

”元太”が”小五郎”の側にしゃがんで言った。

「三月ウサギ！そりゃ、気を失ってるんだって」

コナンが言つと、”英理”が言った。

「あら、ちょうどいいわ。この人高いとこ苦手だから。」

このまま、お城までゴロちゃんに乗っけていけば静かに飛べるわ。

悪いけど、皆さん、手伝ってくれる？」

コナン達は、といっても”哀”は周りを気にすることも無く食事をしていたがー。

”小五郎”の体をゴロちゃんの中背中に引きずり上げ縛りつけた。

「ありがとう、皆」

”英理”はそう言つてジャバウオッキの背中に飛び乗った。

その後をコナンが追った。

「ねえ、女王様、僕もお城まで連れてつてよ」

城に行けば何か手がかりがつかめるかも知れないとコナンは思った。

”英理”は少し迷う風情を見せたが言つた。

「いいわ、でも、落つこちないように気をつけてね」

ジャバウオッキは、空高く舞い上がった。

”チェシャ猫の奴にさよなら言い忘れちまつた。

けど、あいつも俺が行くつて言うのに知らん振りだったよな”

コナンはそう思いながら”英理”の横顔を見るともなしに見つめた。  
誰かによく似ている。

しかし、誰なのか見当がつかない。

「ね、おば・・・、女王様。

ネムリネズミから貰った物つて、一本背負いだけなの？」

コナンは先ほどから気になっていた事を聞いてみた。

「そうよ、大体、この人が他の人に何かあげるほどの物を持っているように見える？」

コナンは”小五郎”の貧乏くさいカツコウを見て、思わず納得した。  
そして、”英理”の口調に隠されている愛情に気づいて少しからか  
つてみたくなった。

「でも、女王様はネムリネズミが好きなんだ」

”英理”は顔を朱に染めた。

片手を頬に当てたため、ジャバウオッキの手綱を取り落としそうに

なった。

ゴロちゃんはコントロールを失って大きく揺れ、コナンは”小五郎”にしがみついた。

その拍子に”小五郎”が目を覚ました。

「うわああ！飛んでる！助けてくれえええ！」

うるさい事おびただしい悲鳴が上がった。

「分かったわ！すぐ低空飛行にするから黙ってちょうだい」

ジャバウォッキは下へ降りはじめた。城がどんどん近づいてくる。

”小五郎”は悲鳴を上げつつづけている。そこにコナンの声加わった。

「おばさん！ぶつかる！」

超低空飛行のジャバウォッキは生垣の間をすり抜けるようにして飛んだ。

その急な体の動きに耐え切れず、コナンはジャバウォッキの背中から転がり落ちた。

そして、ゴロちゃんは、コナンが落ちた事など気にも止めず、飛び去ってしまった。

コナンは腰をさすりながら立ち上がった。

どうやら、城の庭らしい。

刈り込まれた、芝生や植え込みは見事な物だった。

遠くの方から、人の話し声がする。

コナンはそちらの方へ行ってみる事にした。

## 夢の章 9・トランプの兵士

三人の人の声が聞こえてくる。

コナンは、植え込みに隠れて様子を伺う事にした。

葉陰から、見えるその姿を見たとき、コナンは思わず声を上げそうになった。

”佐藤刑事、高木刑事、それに千葉刑事・・・。

みんな、なんて格好なんだ”

高木刑事と千葉刑事は、それぞれ胸に名札のように、ハートのジャック、スペードのジャックのカードをつけた、作業服風の姿である。

それに反して佐藤刑事は、赤のノースリーブで、黒のスパッツ。

シャツの胸元には大きなハートの切込みが入るというあでやかな格好だった。

いつもと違う、大胆な服装にコナンの目はひきつけられそうになりながら、

三人の様子に注意を集中した。

立っている佐藤、千葉両刑事にはさまれて、高木刑事はうなだれて座り込んでいた。周りには赤いペンキの缶がいくつも転がっている。

コナンの首筋に、何か液体が滴り落ちた。

手でぬぐってみると赤い。

しかし血の色ではない。

匂いをかぐ。

やはりペンキだ。

高木刑事が空を仰いで泣き言を言った。

「ハートのエース、スペードのジャック、ダメですよ・・・、もう、もうすぐハートの女王様が御見えです。」

ああ僕は赤いバラと白いバラを間違えて植えた罪で首をちょん切ら

れるんだー!」

「ハートのジャック!諦めてはだめ!」

「ハートのジャック!あんた兵士だろ!

兵士なら兵士らしく時間ぎりぎりまで仕事をやり続けるよ!」

二人の言葉に、高木刑事は刷毛を手に持った。

「やってみます!」

そう言うのと猛然と、まだまだたくさんある白バラにペンキを塗り始めた。

「よし!俺も、手伝うぞ!」

千葉刑事も刷毛を握った。

佐藤刑事はコナンの隠れている植え込みに声をかけた。

「そこに隠れている誰か、でてらっしゃい。そして手を貸して」

コナンは素直に出て行った。

「さ、早くして。すぐに女王様が御見えよ」

コナンは有無を言う暇も無く、ペンキ缶と刷毛を持たされ、矢継ぎ早の佐藤刑事の指示のまま、バラに色を塗り始めた。

”俺、一体何やってんだ?”

そんな疑問を抱きつつも、何とかすべてのバラを塗り終わった時、遠くから人のざわめきと「女王様のおなり!」という声が聞こえてきた。

「ペンキ缶と刷毛かして!」

声と同時に佐藤刑事はコナンの手から二つの物をひたたくって姿を消した。

高木刑事も千葉刑事も、芝生の上のペンキ缶も無い。

コナンは何をする事も思いつかず、庭の通路の真中に突っ立て人影が近づいてくるのを見ていた。

### 現実（うつしよ）の章 3・夜明け

夜は静かに明けていった。

病室もまた静かだった。

規則正しく落ちる点滴、コナンの呼吸につれ上下する毛布の動き。

哀はただずっとそれを見つめていた。

カーテンの隙間から朝日がさしてきた。

哀は立ち上がると勢いよくカーテンを開いた。

朝の光が病室に満ちた。

その明るさにソファで眠っていた阿笠博士は目を擦りながら起き上がった。

「す、すまん。哀君。いつの間にか眠っておったようじゃ」

哀は阿笠博士の声も姿も目に入らなかった。

少しでも、何か変化はないかとコナンの顔を食い入るように見つめる。

まばゆい朝の光はコナンの顔を照らしていた。

しかし、コナンの表情はまったく変わらない。

しばらく、身動きもせずコナンを見つめていた哀は、

やがて顔を伏せてベッド脇の椅子に腰掛けた。

阿笠博士が、自分の肩に手を乗せるのを感じたが哀は顔を上げなかった。

ノックの音がして、看護婦が入ってきた。

「少し、江戸川君にまぶしいんじゃないかしら」

看護婦は、まるでコナンの目がさめているかのように話し掛け、レースのカーテンをひいた。

「検査だから、痛いけど、動かないでね」

そう言いながら、コナンの腕に注射針を刺す。

しかしコナンはピクリとも動かない。

看護婦が去ると、哀はつぶやいた。

「もう、痛みにも何の反応もないのね・・・」

「哀君・・・」

阿笠博士の言葉を無視して哀は言った。

「私、工藤君は、私が、目覚めないように祈ってもきつと、目覚め  
ると思ってた。

だって、どこも悪いところは見つからなかったし。

物語だったら、よくあるじゃない。

意識の無い病人が、夜明けとともに目を覚ますシーン。

だから、夜が明ければきつと目が覚めると、無意識のうちに思い込  
んでいたのよ。

さすが、『出来損ないの名探偵』を作った科学者。

なんて論理的な推論かしら」

哀は、そう言うと一緒に静かに笑った。

「哀君。大丈夫じゃ、きつと新一は目を覚ます」

哀はうつむいた。こぶしを握り締めて必死で涙をこらえた。

”泣いてはだめ。泣いたって何も変わりはない。

それに私は涙で誰かに甘える資格なんて無い”

## 夢の章 10・ハートの女王

コナンのほうにやって来た一行から一人の黒い影が走り出た。

「怪しい奴！名を名乗れ！」

コナンの目の前に、というより、首のまん前に、

よく切れそうなサバイバルナイフの刃が突きつけられた。

” あんたの方がよっぽど怪しい格好だよ。白鳥警部 ”

コナンは声に出せないままつぶやいた。

警部は、フードつきの黒いマントを羽織りその下も黒ずくめである。

「待てや、切り裂きジャック！」

警部はナイフを下ろした。その呼び名を聞いてコナンは思った。

” うわぁ！怪しいんじゃない、危ねえのかよ ”

「お、やつば来たんかい」

” 平次 ” がコナンの前に立って、見下ろした。

「公爵、そこにいるのは誰？」

聞き覚えのある声にコナンは ” 平次 ” の後ろをのぞきこんだ。

「あ、歩美ちゃん？」

きらびやかに飾られた一角獣の背中の上に、横座りで乗っている

淡いピンクのドレスの少女は間違いなく歩美だった。

ただ、いつものカチューシャではなく、ティアラを頭につけている。

そして、武装した、どこか見覚えのある、兵士たちに囲まれていた。

コナンは考えた。この兵士達とどこで出会ったろう。

事件の時に会った刑事達だったような気もするのだがはつきりしない。

コナンの思考は、怒鳴り声で、途切れた。

「無礼者！」

再び白鳥警部がコナンの首筋にナイフを突きつけた。

「この方をどなたと心得る。」

この王国の4人の支配者のうちの一人、

ハートの女王、コーデリアさまであらせられるぞ！」

「こ、こーでりあ？じゃあ、お姉さんたちなんかいたりして」

コナンは、こわばった笑みを浮かべながら冗談を言おうとした。

「私、よくそう言われるの。うんざりしちゃうわ」

歩美の言葉に、白鳥警部はコナンが決して好きになる事の無い種類の笑顔を浮かべた。

「では、早速、この者の首、落としましょうか？」

「待って！ダメよ、ジャック。」

私、アリス君が気に入ったの。

きつと、私たち結ばれる運命なんだわ」

渋々、といった表情で白鳥警部はナイフを下ろした。

”おいおい、ちよつと待てよー”

コナンは心の中で思いつつ言った。

「いや、でも僕にも都合つてもんがあ・・・」

コナンは、首筋に再びひやりとした物を感じて言葉を止めた。

白鳥警部が明るい笑顔でコナンを覗き込んでいる。

コナンは、目だけ動かして、自分の首に当たるナイフを見つめた。

「ダメよ、ジャック。アリス君を恐がらしちゃあ」

歩美は、一角獣から降りるとコナンの手を取った。

「さ、ユニコーンに、いっしょに乗りましょう」

”平次”が歩美とコナンを一角獣の背に乗せた。

「おい。公爵、いったいどうなってるんだよ」

「今日は、ハートの女王様の連れ合いを決めるために、サッカー大会をする予定やったんや。

でも、女王様がお前を気に入ってしもつたようやから、これからお城に戻って、アリス、お前のお披露目や」

「ちよつと待て、何でそんな話になるんだ！」

コナンの抗議は無視され、一向は城に向かって歩き出した。

しばらくして、コナンは聞いた。

「ねえ、歩美ちゃん・・・じゃなくて、ハートの女王様」

歩美はコナンに笑顔に向けた。

「アリス君は、私のこと、コーデリアって呼んでくれていいのよ」

「そう、なんだ。で、僕の名前は、アリス、じゃなくてコナンなんだけど」

「コナン？ヘンな名前。」

アリス君にはちっとも似合わないわよ。

アリス君はアリス君」

” あんまし、アリス、アリスって連呼しないでくれよ。

なんだか、自分の名前が、あやふやになっちまいそうだ。

名前・・・、俺にアリスという名を押し付けて消えちゃったあいつ、白ウサギ。

奴は一体どこにいるんだ。

『火と水、風と土の集う場所』って一体どこなんだ？”

コナンはそう思いながら歩美に話し掛けようとした。

「ねえ、あ、あゆ・・・歩美ちゃん？」

コナンは、目の前の少女の名前が、

思い出せなくなってきたのに気がついて愕然とした。

少女は、そんなコナンに気づいたのか、どこか大人びた満足げな微笑を浮かべた。

それは、コナンが現実で知る、同じ顔の少女が決してする事の無い表情だった。

しかし、その不可思議な微笑は一瞬で消えた。

少女は屈託の無い笑顔で言った。

「アリス君、私はコーデリアよ。

コーデリアと呼んでちょうだい」

コナンは、奇妙な不安を感じて、名前を呼ぶのをためらった。

しかし、少女は、

コナンが自分の名を呼ぶのを待っている。

「コーデリア」

そう口に出したとたん、目の前の少女の名はコーデリア以外に考えられなくなった。

「コーデリア、君はこの国の女王様なの？」

「ううん、この国は、私と、ダイヤ、クラブ、スペードの王様達  
4つに分けて治めてるの」

「今から行くのは、君のお城？」

「違うわ、皆のお城よ。」

この国全体の王様が集まって決めなきゃならないことがあるときと  
か、

御祭りの時は、王様たちがこの国の真中にあるお城に集まるの。

今日は、私の旦那様になる、

ハートの王様を決める御祭りだったんだけど、良かった、アリス君  
に出会えて」

”歩美”はコナンに体を摺り寄せた。

コナンは顔に血が上るのを感じた。

「ねえ、コーデリア。君達がこの国を治めてるんなら知ってるかい。

『火と水、風と土の集う場所』って。」

”歩美”は首を横にふった。

「知らないけど、アリス君そこに行きたいの？」

「ああ、白ウサギを探しているんだ」

”歩美”は不思議そうに言った。

「白ウサギ？アリス君のペット？いなくなっちゃったの？

ペットを探すのなら、『プライド探偵事務所』がお奨めよ」

「い、いや、そうじゃないんだけど」

苦笑いするコナンに”平次”が声をかけた。

「ほら、アリス、城に着いたで」

## 現実（うつしよ）の章 4・朝の病室

何か食べたい物は無いか、と聞いた阿笠博士に最初、哀は何も答え無かった。

しかし、あまりに心配そうな阿笠博士の顔を見て、言った。

「何でもいいの、暖かい物が食べたいわ」

気温が低いわけではないのに、寒かった。

” 工藤君はもう目を覚まさない ”

確信が胸の奥に住み着いている。

それが、哀の心を凍らせていた。

控えめなノックの音がした。

買い物に出た阿笠博士が戻ってきたかと、

振り返りもしなかった哀に聞きなれた声が話し掛けた。

「灰原さん」

「吉田さん・・・」

二人は向き合ってコナンのベッドの横に立った。

「灰原さん、目、真っ赤よ。大丈夫？」

灰原は思った。

” この子はどうしてこんな時に人を気づかえるのだろう。 ”

自分の目だって、泣き腫らしたのと眠ってないせいで、充血しているじゃない ”

「吉田さん、眠ってないんでしょう」

歩美はうなずいた。

「コナン君、まだ目を覚まさないのね」

哀は、身動き一つせず、眠りつづけるコナンのほうを見て答えた。

「ええ、どこも悪くは無いらしいんだけど。」

今日もう一度、検査しなおすそうよ」

「もしかしたら、目が覚めてるかもしれないと思って、私、ご飯食べたらずぐ来て見たの」

「朝ご飯・・・、本当に食べれたの？」

歩美は朝ご飯どころか、夕食だって喉を通ったか怪しい憔悴ぶりだった。

「灰原さんも・・・」

歩美はそう言う口もつた。

”私はどんな顔をしているんだろう”

哀は、思いながら言った。

「とにかく、私たちに今できることは、何も無いわ」

哀はいつもどおりの口調に聞こえる事を祈りつつ、肩をすくめた。

「私、昨日の夜、神様をお願いしたの。」

コナン君が目覚ましてくれたら、嫌いなピーマン残しません、って。

でも・・・」

「良かったじゃない、ピーマン食べずに済んで」

哀はあまりにも幼い願いの歩美に腹立ちを覚えた。  
所詮彼女は子供。

歩美の苦しみなど、哀自身のそれとは比べ物にならないのだ。

”彼女を自分と同じように苦しめたい”

哀は自分の残酷な気持ちはどうする事もできなかった。

哀は、優しい声と笑顔で言った。

「ね、吉田さん。」

もし神様が江戸川君の目を覚ましてくれたら、なんでもするの？」

歩美は涙を浮かべた瞳で、哀の顔を見つめうなずいた。

「じゃあ、神様が、江戸川君の目を覚ましてくれる代わりに、

吉田さんを嫌いになるようにしちゃったらどうする？」

「こ、困るよ、だって、私、コナン君のこと・・・」

途惑った様子の歩美を、哀は意地の悪い満足を持ってみた。

「ふうん、吉田さんは江戸川君の目が覚めなくてもいいんだ」

歩美は哀の言葉にしばらくうつむいて黙りこんだ。

「私、いいよ。」

コナン君が、私を嫌いになっても、目を覚ましてくれるなら」  
苦しそうに、歩美は答えた。

「いい子なのね。」

じゃあね、もし江戸川君が目覚める代わりに、  
吉田さんの事、嫌いになつて、私の事好きになつちゃったらどうする？

あなたの事、見向きもなくなって、私とずっと一緒。

そうなたとしても、吉田さん、江戸川君に目を覚まして欲しい？」

哀は、歩美を苦しめることに喜び感じる一方で、心の奥は叫んでいた。

”私、一体何やっているの？”

これって、ただの八つ当たりじゃないの！”

最初の質問よりも、長い沈黙のあと歩美は答えた。

小さな、ほとんど聞き取れないほどの声だった。

「いいよ・・・。灰原さんなら・・・、灰原さんならいいよ」

哀は、恥ずかしさにいたたまれない気持ちになった。

思わず歩美を抱きしめてその肩に顔をうずめた。

「だ、大丈夫？灰原さん」

歩美が、氣遣わしげに声をかけた。

哀は歩美から離れ、無理やり笑顔を作った。

「大丈夫よ、吉田さん。ごめんね、変な事聞いて」

病室のドアが開いて、元太、光彦が入ってきた。

二人は、哀、歩美には目もくれず、コナンのベッドに近づいた。

横たわるコナンを見て光彦が、気落ちしたようにつぶやいた。

「昨日と全然変わっていませんね」

その言葉に、歩美が嗚咽を抑えた。

初めて元太と光彦は歩美に気づいた様子を見せた。

「俺達も、ガッコ始まる前に寄るつもりだったんだから、

いっしょにくれれば良かったんだぞ」

「歩美ちゃん、心配だったんですね。」

おうちの方が、昨日ほとんど眠ってないって。大丈夫ですか？」

二人は歩美を囲むように話し掛けた。

哀は取り残されたような気持ちになった。

所詮自分は彼らの仲間には入れないのだ。

そう感じた時、元太が、哀に大きな包みを差し出した。

「かあちゃんの作った握り飯だ。喰つとけよ。灰原」

「あ、ありがとう」

途惑いながら、哀は包みを受け取った。

「かあちゃんが、言ってたぞ。」

病人を看病する方が病人になっちゃ、絶対ダメだって」

哀は、言葉を出せずうなずいた。

光彦も、哀にビニール袋を渡した。

「あ、僕、果物持って来ました。」

体調の維持には、ビタミンが必須ですからね」

哀の両手は一杯になった。

胸の中も、何かわからないもので一杯になるような気がした。

それが、目からこぼれ落ちないように、哀は二人から目をそらしていった。

「ありがとう、私、今日は学校休むから小林先生にそう言って。」

再検査の結果が知りたいの」

「大丈夫だって、コナンの奴、丸一日飯食ってないだろ。」

腹へって昼飯時には目を覚ますって」

「元太君じゃあるまいし。」

でも夜までにはきつと目を覚めますよ。

なんたって彼が楽しみにしてたサッカーの試合が今日ありますからね」

まるで根拠の無い理屈だったが、哀はそれを信じたかった。

「みんな、本当にありがとう」

去っていく三人の背中に届くはずの無い小さな声で

哀は知らず知らず呼びかけていた。

## 夢の章 11・裁判

コナン達は大広間に通された。

「さあ、アリス君、各国の王様に紹介するわね」

”歩美”に手を引かれたコナンの耳に聞き覚えのある声が響いた。

「やあ、アリス、久しぶり」

「アリスちゃん、元気だった？」

お馴染み過ぎるほどのシャーロックホームズの格好をした男性と、

19世紀風のドレスを、粹に着こなした女性がコナンに声をかけた。

「父さん・・・、母さん。」

シャーロック・ホームズとアイリーン・アドラーのつもりかい？」

「あら、アリスちゃん、つもり、だなんて。母さんはアイリーンよ」

「そして私はシェリングフォード。」

あ、念のために言っておくけど、シェリング・フォードじゃないからね」

コナンは呆れて言った。

「はい、はい、はい、でも、何でシャーロックじゃねえんだ」

「モリス・ルブランじゃあるまいし、

恐れ多くて、その名を、勝手に使えるわけ無いじゃないか」

”歩美”がうれしそうに言った。

「アリスちゃん、クラブの王様の、子供なの？」

やっぱりコーデリアにぴったりの人だったのね」

「良かったじゃないか、アリス。可愛いお嫁さんが出来て」

「こんな素敵な娘が出来て母さんもうれしいわ」

コナンは大きなテーブルの上座に引きずられるように押し込まれた。両親と”歩美”の間にはさまれて、コの字型のテーブルを見回すと、各席に見覚えのある顔があった。

「あちらが、ダイヤの女王ヴィク様、王のディック殿。」

向こうがスペードの女王の、久栄様と、王の長谷川殿よ」

”服部大阪府本部長が、スペードの王様が、何で、和服なんだろう。でもよく似合ってるよな”

コナンは二人を眺めながら思った。

「はい、おまたせ。王様用の特別献立」

軽い声でコナンの前に大きなお皿を置いたのは、召し使いの御仕着せを着て、

鼻に大きなバンソコウを貼っている娘だった。

「園子？」

コナンはその名を呼んだが、いぶかしげな視線が返って来るだけだった。

「園子？なんなの？私は料理番のキンジーよ」

「は、はは……。キンジーねえ。」

キンジー・ミルホーンが料理を作るの？」

「作りやしないわよ。私は料理”番”。」

出来た料理の番をするの。さあ、さっさと食べてよ。

片付かないんだから」

高飛車に言われコナンは、反射的に大皿のパイにナイフを入れた。

突然パイは二つに割れ、中から24羽のクロツグミが歌いながら飛び出した。

「わ……。びっくりした」

コナンが言うのと同時に”歩美”が叫んだ。

「嫌！これは私が焼いたタルトじゃないわ！料理番！私のタルトはどうしたの！」

「知らないわよ。台所にあつたのは、これだけよ」

「でも、私、タルトは台所に置いておいたのよ」

白鳥警部が抜き身のナイフをちらつかせながら、園子に近づいた。

「ほう、では、料理番、あなたは、ハートの女王様のお作りになったタルトの事を

知らないとおっしゃるのですか？

あなたは、女王様がタルトをお作りの間、一体何をしていたんで

すか？」

園子はナイフに怯える様子も無く答えた。

「庭の洗濯物を取り込んでいたわよ。」

「この城は人使い荒くてね、料理番もメイドも兼任なのよ」

「洗濯物を取り込んでいたことを、誰か証明できますか」

「もちろん。その時、ツグミに鼻先つつかれて、

ディーツにワトソン先生の所へつれてってもらったんだもの」

「そうです、キンジーと私は、ドクター・ワトソンのところへ行きました」

園子をかばうように、現われたのは京極であつた。

「では、ドクター・ワトソン。」

あなたが料理番の怪我の治療をした、と」

新出医師がいつのまにか、園子と京極の後ろに現われた。

「そうです、確かにこの料理番キンジーと、ディーツは私のところに参りました」

新出がそう言い切ると白鳥警部は言った。

「それでは、女王様がタルトを焼いたあと、

台所は無人となり誰でも入れる状態だったという事になる。

そのとき所在が知れなかったのは・・・、

ハートのジャックお前が犯人だな！」

末席に目立たないよう立っている高木刑事を白鳥警部は指差した。

目暮警部と、遠山刑事部長が、高木刑事の両脇を抱え、コナン達の前に引き出した。

コナンは小声で父親に話し掛けた。

「おい、父さん。どうなってるんだよ。」

なんかめちゃくちゃだぞ」

「おや、アリス、知らないのかい。」

昔から、ハートの女王のタルトを盗んだのはハートのジャックと決まってるんだよ」

からかうような口調の父親にコナンはあきれて言った。

「そりゃ、マザーグースだろう。」

それに、高木刑事は・・・」

「高木刑事？誰だい、それは」

「高木刑事が誰って・・・、

ほら、目暮警部と、遠山刑事部長に連行されている・・・」

コナンの言葉を遮って、母親がにこやかに話し掛けた。

「アリスちゃん、なに言ってるの？」

あれは、ハートのジャック、そして、ダイヤのジャックにスペードのジャック。

ほら、よく見てごらんなさいよ」

コナンは彼らを見た。

そして息をのんだ。

彼らは、誰だ？

ハートや、ダイヤ、スペードのジャックでは無い。

でも、そうでなければ一体誰だ？

恐怖に似た感情が自分に忍び寄るのをコナンは感じた。

「お待ち下さい、刑吏殿」

バラ園で、ハートのエースと呼ばれていた女性が、

切り裂きジャックと呼ばれる男と、

ハートのジャックと呼ばれる男の間に割って入った。

”ハートのエース、ジャック、それに切り裂きジャック・・・

さっきまで別の名前を覚えてたのに、今だって思い出せそうなのに・

・

ちきしょう！思い出せねえ！”

コナンは強くこぶしを額に押し当て、目をつぶった。

声が聞こえてくる。

「刑吏殿、僕じゃありません！僕はその時・・・」

「ハートのジャックは、この私と一緒にでした！」

”佐藤刑事”が声を上げた。

「ほう。どこにいらしたのですか」

「バラ園です、女王様のバラの御世話をしておりました」

「バラ園ですか……。『Under the rose』という言葉がありますが、

本当は、何をされていたのですか」

「Need not to know」

”佐藤刑事”の声が冴え冴えと響いた。

”白鳥警部”は、その声の冷たさにひるむ様子を見せるどころか、むしろ面白がるように言った。

「あのバラは、実に鮮やかな紅でくないしたね。

まるでペンキ塗り立てみたいに。」

「ええ?! あそこのバラにペンキを塗ったの?!」

”歩美”の大声に、コナンは飛び上がった。

そして次の”歩美”の言葉を聞いたとき、名前の事など頭から吹っ飛んだ。

「ジャック! ! 今すぐ、この二人の首、切り落として!」

”白鳥警部”はゆっくりと、”佐藤、高木刑事”の側に近寄った。

”高木刑事”が、”佐藤刑事”を背中でおおうとする。

が、”佐藤刑事”は明らかに、一戦交えるつもりらしく、身構えた。しかし、二人は、周りの兵士達に、身動きできぬよう、押さえつけられた。

コナンは慌てて、テーブルの上に飛び乗り、銀のティーポットを蹴飛ばした。

狙い過たずポットは”警部”の頭を直撃し、”警部”は気を失った。

「ひつでえことするなあー」

”平次”が言った。

「お前、何ともねえのかよ。

何もしてねえ人間が首切り落とされるところだったんだぜ」

”平次”は、コナンの側に立ったまま、見下ろすように話した。

「アホやなあ。ハートの女王様は氣い変わりやすいんや。

今だって切り裂きジャックが3歩、歩く間に命令撤回ちゅうことも

充分ありえたで。

それに首切り落とされたかで、”ここ”ではすぐ元通りや。もとに戻らへんのは、ハンプティ・ダンプティだけや”

”平次”の口調は軽かった。

コナンは思わず調子を合わせて相槌をうった。

「ああ、そうだったな」

しかし、心の中では、何かが必死になってもがいていた。自分が深い水の中に飲み込まれていくような気分だった。

”『ハンプティ・ダンプティ』、『元に戻らない』”

なんでこんな言葉でこんなに胸がざわつくんだ”

それに变だ、公爵は、いつもはこんな風に俺を見下ろして話したりしなかった。

なるべくしゃがんで俺に視線を合わせるようにしていた。

いつもいつしよに推理する時に。

いや、あれは公爵じゃなかった。

誰だったんだ。

ちきしょう！頭が働かねえ！

考えようとすると思わず誰かが邪魔しやがる”

コナンは”平次”を見上げた。

”平次”もコナンを見返した。

その瞳に一瞬氷の光が浮かんたように見えた。

コナンの考えを見透かすような笑いが”平次”の口元をゆがめた。

「アリス、何考えとるんや。

今の問題は、誰がハートの女王様のタルトを盗ったかっちゆうことやろ”

”平次”の言葉に、コナンは頭をふった。

そう、とにかく早くタルト泥棒を見つけなくては。

コナンは少し後ろめたい気持ちで”新出医師”が診察している”

白鳥警部”を見た。

”警部”はまだ気を失っている。

彼が張り切ってナイフを振り回す前に、犯人を見つけ、  
コーデリアに執り成しなくては、とコナンは考えた。  
いくらずく元通りになるとしても、

目の前で切り裂きジャックのナイフさばきを見学したくはなかった。  
「ねえ、コーデリア。タルト作った後、君は何をしたの？」

コナンは”歩美”に聞いてみた。

「私？私はお部屋に戻ってはちみつパン食べたの。」

その後、お庭でバラを見ようと思って散歩に出たの」

「ふうん、作った後のタルトはどこにしまったの？」

「え〜っと、あ！」

と、”歩美”は大声を上げた。

「私、タルトをはちみつパンといっしょにお部屋にもって帰ったのよ！」

”あゝ、やっぱし、こんなこつたろうと思ったぜ・・・”

コナンは頭を抱えた。

”歩美”は元気よく周りの者に命令していった。

「じゃ、料理番。私のお部屋に行って、タルトを持ってきて。」

それから、皆の者は宴会の準備を。

これから私の将来の旦那様になるアリス君の御披露目なんだから」

「ちよつと待・・・」

コナンは首筋に当たるナイフの感触に言葉をとぎらせた。

目だけ上にあげて”白鳥警部”を見る。

「あの・・・、元気になってよかったですね」

「おかげさまで。たいしたキックでしたね」

”白鳥警部”はナイフを収めた。

しかしコナンの背後からは去っていかなかった。

コナンの前に、ハートの女王御手製のタルトが運ばれて来た。

「一生懸命焼いたのよ、さあ、召し上がれ」

コナンはタルトを見つめ、しばし動きを止めた。

よく言えば独創的な形であり、焼き色はしっかり過ぎるぐらい入っ

ている。

食中毒の心配だけはしなくて良さそうだ。

果たして、口にしてみれば、わざわざらしくなく美味しいといえるだろうか？

コナンは自信が持てなかった。

それに”チェシャ猫”の注意がある。

必要最低限のものしか口にできなかったし、何一つ忘れた事など無いはずである。

しかし、胸の奥には不安なざわめきがあった。

”俺は、本当は沢山の事を忘れてしまっているんじゃないか？

そしてそれがわからなくなっているのでは？”

このタルトを口にするとそんな事すら忘れてしまいそうな予感があった。

「あの、僕、今あんまりおなかすいていなくて・・・」

コナンの言葉を聞くや否や”歩美”の瞳に大粒の涙が浮かんできた。

「そ、そうよね。これあんまり美味しそうじゃないものね。」

一生懸命作ったけどやっぱりダメなのね」

”歩美”はしゃくりあげながら言った。

「こら、アリス。ダメじゃないか女の子泣かしちゃあ」

「そうよ、アリスちゃん。料理は外見じゃなくて中身よ。まずは一

口」

両親と、背後の”白鳥警部”の無言の圧迫感に押し出されるようにして、

コナンはタルトを一口食べた。

「あ、これ、おいしー」

そう言っただけでコナンは心に何かひっかかるものを感じた。

”あれ、レモン味じゃないんだ。

でもなんでレモン味なんて思いついたんだろう。

見れば苺のタルトだって分かるのに”

「どうしたの、アリス君。考え込んで。やっぱり変な味？」

”歩美”は心配そうに聞いた。

その声に、コナンは、味について考えるのを止めた。

” 何味であろうと、おいしければそれで良いじゃないか ”

コナンは思った。

「 ううん、おいしいよ。 もうひとつもらっていい? 」

コナンの言葉に ” 歩美 ” はうれしそうにうなずいた。

タルトを夢中で食べるコナンの周りでは、 にぎやかに宴が始まった。

## 現実（うつしよ）の章 5・ロビー

哀は病院のロビーに座ってぼんやりと行き交う人を見つめていた。病室には誰もいない。

博士はコナンの検査に付き添っていった。

長時間かかる検査だから、その間、病室で休むように、と博士は言った。

しかし、誰もいない病室は、耐え切れなかった。

玄関の自動ドアが開き、誰かが入ってくる。

病人なのか、見舞い客なのか？

” 工藤君なら、こんな時でも、推理を怠らないだろうな ”  
ふと思いついて哀は一人笑う。

それからまた、玄関を見つめる。

” 自分は待っているのだ ”

ふとそんな考えが浮かんでくる。

” 誰を？ ”

頭の中のもう一人の自分が聞いてくる。

哀は、考えた。

そしてその答えを思いついた時、暗い笑みが唇に浮かんだ。

” 私はジンを待っている。 ”

彼がやってきて私の頭に弾丸を打ち込むのを。

工藤君は目覚めない。

ただ、一日声を聞かないだけで耐えられない。

そう、たとえその声が私の名を呼ばなくても、

その笑顔が、私に向けられなくても、声を聞きたい、笑顔が見たい。

それが、叶わないのなら、いつそ・・・ ”

哀は自分の目が熱くなるのを感じた。

涙がこぼれ落ちる。哀は泣いている姿を誰にも見られないように、必死で涙をぬぐい周りを見渡した。

しかし、誰も哀に注意を払う者などいなかった。皆、自分の体の事で精一杯なのだ。

哀は「キッド」という言葉を耳にしたような気がした。声のほうに注意を向ける。

そこには大きな荷物を抱えた少年と、ボストンバッグを持った少女、そして手ぶらの中年男性が、歩いていた。

少年の顔はどこか工藤新一を、哀に思い出させた。

「お父さんって、本当にバカ！

キッドの資料の入ったダンボール箱持ち上げようとしてぎっくり腰なんて」

「大声で言っな、青子。

すまんなあ、快斗君。

青子が、君に学校を休ませてまで退院につき合わせて。

荷物など、私一人で、持っていていけるのに・・・」

「何言ってるの、父さん。

入院中も、キッドを知るためとかいって、美術や手品の本一杯持ってきたから、

こんな大荷物になっちゃったんじゃない。

こんな重いの持ったりしたら、またぎっくり腰になっちゃうわよ」

「青子の言っとおりですよ。

警部には、じゃなくて青子には、いつも世話になっているし、しっかり休んでまた警部に活躍してもらわなくちゃ」

三人は、哀の側に座った。

中森警部。哀は新聞で見た顔を思い出した。

キッド専任の刑事。

”そう、入院してたの。

でも、もう退院なのね。

あなたと同じようにキッドを追っていた探偵は、目覚める気配さえない、

知っているわけないでしょうけどね”

哀の視線に気付きもせず、中森は腕組をして言った。

「快斗君が言うように、ゆつくりとも出来ないんだよ」

快斗と呼ばれた少年は不思議そうな顔をした。

「でも、最近キッドは出てきてないじゃないですか。

予告状が届いたという話も聞きませんし」

「1週間後に、米花博物館で”アスランの星”

というブルーダイヤが展示されるんだ。

そいつは、いかにも奴好みのしろモンだからな」

「ダメよ、お父さん。」

もう2、3週間は仕事も軽いものにしなさい、って先生に言われているのに」

「そうですよ、大体、キッドは予告状無しで仕事なんかしませんよ」

「いや、快斗君。奴に油断は禁物だ」

哀は少年が、警部に聞こえないようそつとつぶやくのを耳にした。

「絶対、大丈夫だって・・・」

警部が立ち上がった。

「しまった！病室のロッカーに本忘れた！取りにいつてくる」

「もう、お父さんったら、あれほど忘れ物ないの？って言ったのに」

青子の声を背に、中森警部はエレベーターのほうに去った。

『中森様、中森銀三様。会計窓口3番までおいで下さい』

アナウンスの声に青子が立ち上がった。

「快斗、お金払ってくるから待ってて」

哀のまわりは急に静かになった。

視線を感じて見上げると、少年が哀に笑いかけていた。

「うるさかっただろう、ごめんな」

哀は返事をしなかった。

しゃべりたい気分ではなかった。

そんな哀の様子に気がつかないのか、少年は親しげに話し掛けてきた。

「誰か、家族が入院してるのかい？お父さん？お母さん？」

「家族は皆死んだわ。とつくにね」

冷たく言い放つ哀を気にも止めぬ風の、明るい調子で少年は言った。  
「俺んところは、父さんが死んでんだ。」

まあ、お袋は元気だけどな」

哀は、その言葉に少年の顔をみた。

少年は、にこやかに哀を見つめ返す。

哀はいつの間にか見ず知らずの人間にあたっていた自分が恥ずかしくなった。

突然、大人びた口調で少年が言った。

「君は、誰か、とても大切な人の事を心配しているね」

哀は、何も答えなかったが、少年は哀の答えを聞いたかのようにうなずいた。

そして、哀の目の前で、ひらりと手を回した。

何も持つていなかったはずの手に一輪の花があった。

白い花である。

「何？」

哀は思わず聞いた。

「トルコキキョウ。」

白のトルコキキョウの花言葉は、『希望』」

そう言うと少年は哀に花を手渡した。

先ほどの少女が、自分の名を呼ぶ声に、少年は立ち上がった。

哀は、工藤新一に似た少年に何か一言、言いたかった。

けれど、言葉はなにも見つからなかった。

少年は、最後に哀に笑顔を見せると、少女の待つ方へ振り返らず走り去った。

哀の手には、『希望』だけが残った。

## 夢の章 12・鏡

宴は果ても無く続いていった。

いつの間にかすすめられるまま、色々なご馳走を食べてしまった。

おなが一杯になったせいにかまぶたが重くなってきた。

一日いろいろな事があったため、疲れて頭もぼんやりしてくる。

目の前で、楽しげにしている人々の本当の名前はなんだったのだろうか、

考える事もとうに止めていた。

”そもそも、本当の名前なんてあったのだろうか？”

とにかく眠たくてたまらない。

『眠ってしまえば、現実うつつに戻れなくなるから・・・』

誰かがそう言った。

誰？チェシヤ猫だ。チェシヤ猫・・・白ウサギ・・・

火と水、風と土の・・・なんだったつけ？

コナンは頭をふって立ち上がった。

”歩美”が話し掛けた。

「どうしたの、アリス君？」

「いや、あんまり眠いんで、ちよつと眠気覚ましに歩こうかと」

「あら、眠いんだったら無理しちゃダメよ。」

なんなら、ママのお膝でネンネする？」

からかうように”有希子”が言った。

「遠慮するよ」

コナンの言葉に”有希子”はすねた表情になった。

”優作”が笑っていった。

「クラブのエースに、寝室へ案内させよう」

コナンはクラブのエースに手をひかれ、城の人気のない廊下を歩いた。

眠すぎて頭の中に霧がかかったような気分だ。

それでも、心の中に何かひっかかっている気がして、何度もクラブのエースの顔を見上げる。

ようやくその言葉が、浮かび上がってきた。

「ねえ、クラブのエース、『こうつつか』って何？」

「さあ、私には何のことやら」

”由美”は笑顔で答えた。

「そう、そうだね。何の意味もない言葉だね」

コナンは、もうそれ以上何も考えることなく

”由美”につれられて寝室へ向かった。

寝室に入るとコナンはベッドに、うつ伏せになった。布団の柔らかさが心地よい。

”服、着替えなくちゃ・・・、いや、このまま寝ちまおう”

意識が眠りの中に溶けて行く。

”今日は、楽しかった・・・。

明日も楽しいだろうな・・・。

そう、今日と、同じ、楽しい、日が、ずっと・・・続く・・・。”

そう、思った瞬間、コナンは飛び起きた。

おかしい、何かがおかしい。

そう、ずっと、今日と同じ日が続くわけなんてない！

コナンは、頭をふって、その中にかかった霞を振り払おうとした。

”俺は、考えなきゃ。

ここから出なくては。

もうアリスなんて呼ばれるのは沢山だ。

俺は・・・だ。

え？俺？

俺の名前はなんだったっけ？”

”コナン”は黒い恐怖が心臓をわしづかみにするのを感じた。

”俺の名は、アリスじゃない。

それは確かだ。じゃあ、俺の名は？  
ちくしょう！何も思い出せねえ！”

自分がパニックを起こしかけているのが分かる。  
落ち着かなくては。

”コナン”は深呼吸をした。

ふと気づくと、ずっと自分の服の襟元についていた、  
エーデルワイスの花がなくなっている。

”もう、わざわざ、名前を忘れないように、つけとく必要はないな。  
俺の名はアリスなんだから”

奇妙に冷静な思考が心に浮かび上がる。

”コナン”は、必死になってその考えを追い払おうとした。

”今、俺が自分の名前を思い出そうとしてもたぶん無駄だ。

そんな事を考えている間にきつと俺は自分が『アリスでない』  
って事を忘れてしまつて、それで・・・”

”コナン”は身震いした。

”俺が『アリスでない』と分かっている間に考えなくてはならない  
のは

白ウサギの行方だ。

奴は『火と水、風と土の集う場所』と言った。

『火』『水』『風』『土』これは象徴だ。

四つの方位？

古代中国なら、東西南北には、四聖獣がいて、それぞれに、色が・  
、いや違うな。

火と水、風と土対になるものが二組・・・。

そうか、分かったぞ！”

”コナン”が大声で答えを叫ぼうとした時、壁にかかった大きな  
鏡が目についた。

”コナン”は吸い寄せられるように鏡の前に立った。  
自分の姿が映っている。

”コナン”はその姿からなぜか目が離せなかった。

右手を上げて鏡に触れる。

鏡の中の”コナン”は左手をあげてその手に触れる。

鏡の中の”コナン”が右手を上げる。

”コナン”は同じように左手を上げる。

”コナン”は鏡の中の自分に触れんばかりにして立っていた。

”コナン”は魅せられた様につぶやいた。

「これが僕の本当の姿」

鏡の中の”コナン”も唇を動かす。

「僕の名はアリス。ここの住人」

そうつぶやいた”コナン”は、はじかれたように鏡から飛びのいた。

ベッドの横の椅子をつかむと、

鏡の中で薄い笑みを浮かべて立っている自分自身の姿に思いつきり投げつけた。

鏡は割れず、椅子が跳ね返った。

”コナン”は椅子にぶつかり、一瞬息ができず咳き込んだ。

鏡の中の”コナン”はゆっくり姿を変えた。

”歩美”の姿だ。

”コナン”は身動きできずにその姿を見ていた。

そして”歩美”はゆっくり鏡の中から外に向かって一歩踏み出した。水の中から浮かび上がるように

鏡の中からでてきた”もの”は”哀”の姿になった。

”哀”は”コナン”の横に膝まずいた。

”コナン”の頭を自分の膝の上に乗せ、髪をなでた。

「もう少しで、ずっとここにいられるのに、どうして答えを言おうとするの？」

「おめえ、さつき俺を操ろうとしたろう。」

それに、俺を邪魔していいのはここの住人だけなんだろう？」

”哀”は寂しそうに言った。

「どうして、行ってしまおうとするの。」

私がここにいて欲しい人は、皆、現実うつしに戻っていつてしまう。

どうして・・・現実なんてむごいだけなのに」

”コナン”は”哀”の黄金きんの左の瞳に、いいようない哀しみを見た。

何とかしてそれを癒してやりたいと、痛切に思った。

しかし、それは自分の力では到底及ばない事だと直感的に理解していた。

”コナン”は”哀”の頬に手をあてた。

「俺は、もう自分の名前さえ、覚えてねえ。

けど、謎が、白ウサギのくれた謎が残っている。

だから、俺は考えなくっちゃならねえんだ。

チエシャ猫、俺、お前の事、ほっとけねえと思う。

それは本当だ。

だけど、俺が、考える事をやめちまってここに残ったとしても、それはもう、俺じゃねえ。わかってくれるか？」

”哀”の瞳から涙がこぼれ、”コナン”の指を濡らした。

”哀”は”コナン”の手を自分のそれで包むように頬から離して、言った。

「では、白ウサギはどこにいるの？」

”コナン”は一つ息を吸い込んだ。

「火と水、風と土は、宇宙の四大元素だ。

まあ、風は空気をあらわすんだけどな。

タロットカードでは、小アルカナのカードでその4つの元素を象徴している。

剣が、火、聖杯が水。棍棒が風、金貨が土。

そのタロットカードが、変化して、トランプになったと言われている。

つまり、火と水、風と土はスペード、ハート、クラブ、ダイヤのとき。

そしてそれが集う場所は、ここだ。

それらの王たちが集う、まさにこの場所の事。  
白ウサギはここにいるんだ！」

今まで、音がしていたわけではない。

しかし、よりいっそうの静寂が”コナン”の言葉が終わると同時にあたりを包んだ。

そして”コナン” ”哀”と鏡だけを残して、あたりは闇に包まれた。

床さえも闇に飲み込まれ、”コナン”は闇の中に浮いているような気分になった。

ゆっくりとした靴音が近づいて来る。”

”コナン”は音の方向に目を凝らしたが何も見えない。

”哀”が鏡を見つめているのに気づいて、”コナン”もそちらを見た。

鏡の中には、”コナン”だけしか映っていないかった。

そして、映るべき”哀”の姿の代わりの様に、

こちらへ向かって遠くからやって来る人影があった。

”コナン”は、闇の中を見返る。

しかし近づいてくるのは靴音だけである。

もう一度、鏡を見てみる。

人影は、判別できるほど近づいていた、

それは、最初は、黒衣の騎士の姿の、”平次”だった。

しかし、”コナン”達の方に近づくにつれ、その姿は別の人物に変わった。

紺のブレザーに薄緑のネクタイ、16・7歳の少年が、ポケットに手をつ込んで、気楽な表情でやって来る。

”コナン”は、殴られたような衝撃とともに思い出した。

”これは、俺だ！俺の本当の姿だ！”

少年は、窓から外を覗くようにコナンを鏡の向こうから見つめた。気楽な表情は拭い去ったように消えている。

その、見つめる瞳の片方は、黄金きんの色だった。

少年は、鏡の中から踏み出した。

全身が鏡の中から現われた時、その姿は白の衣装をまとった者に変化していた。

「君の勝ちだ。工藤新一君」

キッドは静かに言った。

コナンはキッドの姿をまじまじと見つめた。

瞳の色を除けば、姿形は以前出会った、キッドそのままである。

しかし、あまりに雰囲気が違う事に、初めて気がついた。

本物のキッドは、凜とした冷涼な気配の持ち主であった。

だが、目の前にいる彼の気配は、チェシャ猫哀と同じ、深い悲哀だった。

最初に出会ったとき哀が言った言葉をコナンは思い出した。

『私は白ウサギと同じ”物”よ。』

ティードルダムとティードルディーのようにね』

確かに間の前にいる二人は、そっくりだった。

視覚以外の何かが、コナンにそう告げていた。

コナン達とは違う、まったく別の”何か”。

「おい、白ウサギ。お前達は一体何なんだ？」

「私達は、君達と別の場所より出でて、別の所へと消えさせる”物”。

ほんのひと時でも、君のような人間と行く道が交わった事は、長い道を歩む私達にとって望外の幸運だったよ」

「長い道？お前一体、どのくらい生きてるんだ。

それに、お前の本当の姿は？

名前だって、本当は白ウサギなんてふざけたもんじゃないんだろう」キッドは、コナンの前に、片膝をついて、視線を合わせた。

左の漆黒の瞳は、闇ばかりあったが、右の黄金きんの瞳に深い哀しみがあつた。

そして、コナンに問い掛けた。

「君は、人がいつから夢を見るようになったか知っているかい？」

「知るかよ、そんなの分かるわけな・・・」

コナンは言葉を飲み込んだ。キッドは頷いた。

「そう、だから、いつから生きているのか、私たちにも分からない」  
そして、キッドは立ち上がり、両手を軽く広げ自分の姿に視線を落とした。

哀もコナンから離れ、キッドの側に寄り添うように立った。

キッドは言った。

「我々のこの姿は、君の記憶からの借り物」

「あなたの強い想いの中から、ほんのひと時、仮の姿を借りることができるだけ。」

私たちは、本当の姿も、名前さえも無い存在」

そう言くと、哀は目を伏せた。

コナンは、別れの時が来た事を悟った。

キッドは、コナンの前に手を出した。

その上には最初であった時に見た針の無い懐中時計が在った。

キッドは両手を閉じるように時計の蓋を閉めた。

「さあ、夢の時間はおしまいだ。」

約束通り君に”想い”を、返そう。

そして君の生きる現実に戻るがいい」

キッドは、コナンの目の前で、両手を開いた。

そこに時計の姿は無く、小さな桜草の花束だけが乗っている。「これは、扉を開く鍵。」

その向こうに、君の”想い”がある」

「扉って？」

キッドは、黙って鏡を指差した。

コナンは改めて鏡の前に立った。

表面には自分しか映っていない。

しかし、振り返ると、哀とキッドがいる。

「桜草の花束は、幸運の鍵。」

ただ、鏡に差し込めばいいのよ」

哀が言った。コナンは言葉通りにしようとして、ふとためらった。彼ら、本当の名前も姿も無いという彼らに何か、言いたかった。

「白ウサギ、チェシャ猫。一応そう呼ばせてもらうぜ。

ま、色々あったけど、楽しかったぜ。

俺、お前達の事忘れないからな」

哀がつと、コナンの前に立った。涙が瞳を濡らしている。

それでも笑顔を作ると、コナンにくちづけした。

コナンは、桜の花びらが風に乗って唇にかすかに触れたような気がした。

そして、コナンが何の反応も返す間も無く、

哀はキッドの傍らに戻り、静かに言った。

「あなたは、何も覚えておく事はできないのよ。

このくちづけさえも」

キッドは、マントで哀の体を包むようにして言った。

「我らにとって、現実うつつは夢」

哀の言葉がキッドに続いた。

「夜の夢こそ真実まこと」

そう言い終わると同時に、二人の体は無数の白い光の粒となり、一瞬のうちに闇に散じた。

コナンはただ一人、闇の中に取り残された。

鏡に向かって、桜草の花束を差し入れる。

すると、水の中に入るように茎が途中まで入り込んだ。

普通の鍵のように回してみると、ドアの鍵の開くような、小さな金属音がした。

そして、コナンの手の中で、花は消えた。

コナンは鏡を押してみようと表面に両手を当てた。

手は何の抵抗もなく、鏡の中に吸い込まれ、体もその後を付いてい

った。

バランスが崩れ、コナンはそのまま、鏡の中に倒れこんでいった。体中を、地面にぶつけ、うめきながら立ち上がったコナンは自分が工藤新一の姿に戻っている事に気がついた。

あたりを、見渡す。

どこまでも続く花畑の中に新一は立っていた。

しばらくの間、呆然と新一は、その光景を眺めていた。

色も形も様々であるその花は、カトレア、シンビジウム、ファレノプシス、

そう、どの花も・・・。

微かに、風が吹き、花が揺れた。

新一の記憶の中に目の前の花達の名前が記憶によみがえった。再びそれが消えうせるのを、恐れるようにそつとつぶやく。

「ら・・・ん」

そして、たった一人の人を探すために、新一は花の中を駆け出した。その名を叫んで。

「蘭！」

## 現実（うつしよ）の章 6・午後の病室

コナンは病室に戻ってきていた。

哀は、枕元に白い花を飾った。

そして、眠りつつけるコナンのベッドの側に腰掛けると、そのまま動かなかった。

阿笠博士は、そんな哀を見て、小さくため息をつくと目をそむけた。時計と点滴のしずくだけが、時を刻んでいた。

ドアが微かに開く音にも、哀は振り返らなかった。

密かに交わされる声から毛利探偵がやって来たのだと知れた。

「で、どうなんです。コナンの奴」

「分からのじゃ、やはり検査結果は異常なしじゃ。

脳波の反応も、眠っている以外何の所見も出とらん。

ただ、何の刺激にも反応せん」

「治療とかは、どうなってるんですか？」

「なにやら、小難しく言っておったが、

結局は、原因がわからん事には、手の打ち様も無い、と、まあそういうことらしい」

「本当に、医者っていうのも、役にたたんな。

案外、一発ゲンコツ入れてやれば起きるんじゃないあ？」

「おいおい、毛利君」

二人の話し声を聞きながら、哀は白い花を見た。

『希望』、そんなものはどこにもありはしない。

そう思うと、涙が自然にあふれてきた。

誰に涙を見られても、もうかまわなかった。

ただ、コナンが目を覚まさないのが悲しかった。

しばらくして、誰かがそっと、肩に手をあてた。

涙もぬぐわず振り向くと、小五郎がハンカチを差し出していた。優しく、そして、心配そうな表情だった。

哀は素直にハンカチを受け取り涙を拭いた。

小五郎は、哀を元気づけようとしてか、軽い口調で言った。  
「ったく、コナンの奴。女の子をこんなに泣かせやがって」

ふと、哀は、コナンの表情が微かに動いたような気がした。  
飛び出すように哀はその顔を覗き込んだ。

コナンは相変わらず、静かにまぶたを閉じたままだった。  
いくら目を凝らしても、まっげすら動かさない。

「気のせいだったのね」

哀は小さくつぶやいた。

涙が、あふれ、こぼれ落ち、コナンの頬を濡らした。

「あ!？」

哀と、小五郎は同時に声をあげた。

微かにコナンが顔を動かした。

そしてうめくように声を出した。

「ら・・・ん」

そのまま、静かになるコナンを、哀は息を詰めて見つめた。  
再びコナンが体を動かし、大声で叫んだ。

「蘭!」

と、同時に、小五郎のゲンコツがコナンの頭の上に落ちた。

「バァーロー!人の娘を気安く呼び捨てにするな!」

コナンは文字通り飛び起きて頭を抱えた。

「痛ってえ・・・」

コナンは、そうつぶやいたあと、わけがわからないといった様子  
で病室を見回した。

そして、コナンと同じくらい、啞然として、自分の側に立っている  
哀に気づくと

いきなり、哀の髪を、両手でぐしゃぐしゃとかき混ぜた。

驚きから覚めた哀は、コナンに押さえつけられ、

顔を上げられぬまま上目遣いで、コナンをにらみつけながら言った。

「江戸川君・・・、一体何のつもり?」

コナンは必死で哀の髪を探りながら言った。

「いや、耳……耳がどうしたんだろう？あれ？」

自分のしている行為の無意味さにやっと気づいたかのように、

コナンは、哀の頭から手を離し、不思議そうに、見つめた。

「コナン君。大丈夫か？わしが誰かわかるかの？」

心配そうに、話し掛ける阿笠博士を、コナンは、初めて出会う人のように見た。

哀は不安が胸を締め付けるのを感じて、身動きすらできなかった。しばしの、沈黙のあと、コナンは、驚いたように答えた。

「阿……阿笠……博士？」

緊張が一気に解けた。阿笠博士はコナンを抱きすくめた。

「そうじゃ、コナン君。よかったのお」  
涙声だ。

「よ、よせよ、博士。一体どうなって、痛てっ！」

再び、コナンの頭を、小五郎のゲンコツが襲った。

「よせ、とは何だ！このバカ！皆に散々心配かけやがって!!」

「まあ、毛利君、そんなにゲンコツ入れてまた何かあったら……」

小五郎は、自分のこぶしを照れたように背広でぬぐい、軽く咳払いして言った。

「まあ、とにかく、よかった。目が覚めて」

コナンは、無言で自分を見つめる哀に聞いた。

「灰原、一体何がどうなってるんだ？」

哀は肩をすくめて言った。

「今から、お医者様を呼んでくるから。」

それまでに、推理するのね。名探偵さん」

哀は廊下に出ると閉めた病室の扉にもたれかかった。

涙が溢れ出す。

今度は喜びの涙だ。廊下の向こうから走ってくる人影に気づき、

哀は慌てて涙をぬぐった。

息を切らしながら、その人は、哀の前に駆け寄ると言った。

「哀ちゃん、コナン君は？」

哀は、蘭の乱れた髪を見た。

おそらく、事務所に父親が残した書置きを読んで、

取る物もとりのあえず飛んできたのだろう。

「この病室よ。今日が覚めたところ。私、お医者様呼んでくるから立ち去ろうとする哀の前に蘭は膝まずいた。

暖かな笑みを浮かべて、哀の目もとに残る涙を、自分の指でぬぐった。

そして哀を固く抱きしめた。

「哀ちゃん、ありがとう」

二人はしばらく動かなかった。

やがて蘭が立ち上がり、哀に微笑みかけると病室の中へ入っていった。

哀は蘭の消えた扉を見つめて哀しげにつぶやいた。

「どこまでも、優しい人」

そして、ドアに背を向けて、

医師を呼ぶためナースステーションのほうに歩き出した。

## 現実（うつしよ）の章 7 夢の終り

夕方になって少年探偵団の面々がやって来た。

「やっぱり僕の予想通りでしたね」

「コナン、お前今晚寝れねんじゃねえか？」

「うるせえなあ、もう」

にぎやかにさえざる光彦、元太、コナンの前に蘭が顔を出した。人差し指を唇にあてて、目線でソファーの方を見るように言う。

三人はソファーを見た。哀と歩美が、互いにもたれ掛かって眠っている。

「灰原さんも、歩美ちゃんも昨日寝てませんでしたからね」

「歩美は、お前をすぐ保健室に連れてかなかったのを、すっごく気に入ってたんだぞ」

「あー、悪かったよ」

二人に攻められ、コナンは頭に手をあてた。

蘭は予備の毛布をロッカーから出して二人にかけてやった。

二人の寝顔を覗き込んで微笑む。

「気持ちよさそうね。二人ともいい夢見てるのね。」

そう言えば、コナン君。あんな長い事眠っていて、どんな夢見たの？」

蘭の笑顔を見ながらコナンは考えた。

目が覚めた時には何か覚えていたような気がするのだが・・・。

「うーん、何だか忘れちゃったんだ」

「面白くねえ奴だなあ」

元太の声に重なるように、ドアが開いて、阿笠博士が入ってきた。

「あら？博士、お父さんは？」

「うん？なにやら仕事があるとかで、出ていかれたぞ。」

「今晚は遅くなるそうじゃ」

「やだ、きつと飲みに行くのね」

蘭と話しながら、阿笠博士は、テレビを乗せたワゴンをコナンの枕元に持ってきた。

「コナン君、故障してないテレビ借りれたぞ」

「Thank you 博士」

「もう、コナン君たら。」

今日は一晩大人しくして、テレビなんか見なくても・・・」

両手を腰に当てて言う蘭に、コナンは子供らしく口を尖らせて言い返した。

「でも、僕もう元気だよ。」

お医者さんが用心しすぎてただけだよ。

もう一晩泊まってけなんて。

テレビでも見なきゃ、退屈で死んじゃうよ。

それに今日、日本とイタリアのサッカーの試合があるんだよ」

「まあ、蘭君。いいじゃないか。さ、テレビを台の上に移すかの」

博士は、テレビを持ち上げようとした。

と、その姿勢のまま引きつった表情になった。

「・・・った。あ・・・う・・・」

腰を曲げたまま声にならないうめきをあげる博士に蘭は駆け寄った。

「どうされたんですか？博士？」

その気配に、哀と歩美も目を覚まし、少年探偵団の面々とともに博士に駆け寄る。

「しっかりして。博士」

博士の様子を、観察した哀は冷静に言った。

「どうやら、ぎっくり腰のようね。これは入院必要かも」

病院の空きベッドがなかったため、コナンは即退院扱いとなり、

その代わりに、博士が入院する事になった。

阿笠博士には、蘭も付き添うと申し出た。

哀は最初、自分だけでよいと言い張ったのだが、

子供の力では、動けない博士を、面倒見ることはどうしても無理だと悟り、折れた。

そして、一人で家に帰すのは不安だという事で、コナンも……。

「このソファ―ベッドなら、哀ちゃんとコナン君、二人で寝ても大丈夫ね」

蘭は、布団を用意しながら言った。

「あ、でも……」

コナンは途惑った。哀が蘭に言った。

「江戸川君、蘭さんに甘えたいのよ。」

私が、補助ベッドで一人で寝るから、

彼と、ソファ―の方で、いっしょに寝てあげて」

「あら、ダメよ。哀ちゃんは、疲れてるんだから、

こんながちがちの補助ベットで眠ったら体壊しちゃう。

自慢じゃないけど、私、お化けさえ出なければ、どこでもぐっすり眠れるのよ」

「そう、じゃ、遠慮なく眠らせていただくわ。私、眠くって」

そう言っと、哀はソファ―に横になって、すぐに寝息をたて始めた。阿笠博士が優しく言った。

「疲れとるんじゃないわ。わしも、痛み止めが効いてきよった。おやすみ」

ベッドから寝息が聞こえてきた。

「さ、コナン君も横になって」

「僕、眠くないよ」

「ダメよ、眠くなくなつたって、横になっておかなきゃ。体を休めた方がいいわ。さあ」

コナンは渋々哀の横の布団に入った。

「じゃ、おやすみなさい。コナン君」

遠征の疲れからか、蘭もすぐ寝息をたて始めた。

三人の寝息を常夜灯の薄明かりの中で聞いているうちに、

コナンはまぶたが重くなってくるのを感じた。

何だか、長旅のあのような疲れを感じる。

それに、哀のぬくもりも心地よかった。

眠りに落ちていく心の中に一つの言葉が浮かんた。

『現実<sup>うつしよ</sup>は夢、夜の夢こそ真実<sup>まじつ</sup>』

”どこで聞いた言葉だろう？”

そんな言葉を思いついた事を不思議に感じながら、コナンはぼんやりと考えた。

”そうだ、江戸川乱歩が求められた色紙に必ず書いていたって言葉じゃねえか。

夢が現実か。現実が夢か？”

少し考えた後、コナンは、一人、含み笑いをした。

”そんなこと考えなくつても、現実<sup>まじつ</sup>は現実だ。それ以外の何物でもねえ”

長い夢から醒めて再び戦いが始まるんだ。コナンはそう感じた。

「でも、今はとりあえず寝るとすつか」

コナンは独りつぶやいた。

しばらくして、病室の中に4人目の寝息が加わった。

夜は、ただ静かに更けていった。

（おわり）

## 現実（うつしよ）の章 7 夢の終り（後書き）

この話は、基本的に「不思議の国のアリス」のパロディーのつもりですが、

「鏡の国のアリス」の登場人物も顔を出していますし、推理小説を読んだ方なら、

「ああ、この人は」という、人物名も出てきています。

それに加えて、マザーグースの歌からも、設定を頂いております。そんな所も楽しんでいただけたら、幸いです。

大変長い作品を最後まで読んで頂いて

感謝いたしますm（――）m。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3009a/>

---

メビウス～夢の国のコナン～

2010年10月9日12時11分発行